

第8章 陰田荒神谷遺跡の調査

第1節 位置と環境 (第4、332、333図・写真図版1、67)

荒神谷山（標高約83m）は、ドウド山（標高約160m）から北に延びる尾根を形成している山の一つである。伯耆国と出雲国の国境となっていたこの尾根は、現在でも鳥取県と島根県の県境をなしており、この荒神谷山からも東西へ尾根が派生し、谷地形を形成している。

荒神谷山頂上からは、北には中海および日本海、弓ヶ浜半島、島根半島を、東には米子市街、雪峰大山を望むことができる。また眼下に、西には、カンボウ遺跡、石田遺跡を、東には、陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区、陰田ヒチリザコ遺跡、陰田小犬田遺跡を俯瞰することができ、荒神谷山と同じ尾根線上には、北から陰田48～51号墳（島根県側の呼称－國吉古墳群）、陰田52～54号墳、國吉遺跡が点在している。

本調査地は、米子市陰田町字荒神谷山および小犬田堤ノ下に所在している。標高約4～30m、荒神谷山の南東の谷地形とそれを中心とした荒神谷山の東側から南側の裾部斜面、および南東部に位置する北東に向かって延びた尾根である。谷地形は奥で階級状に膨らみ、途中、南北から張り出した尾根に狭まれながら下流で扇状に広がり、調査地東辺は陰田小犬田遺跡と接している。

第2節 調査の経過と方法 (第333図・写真図版67)

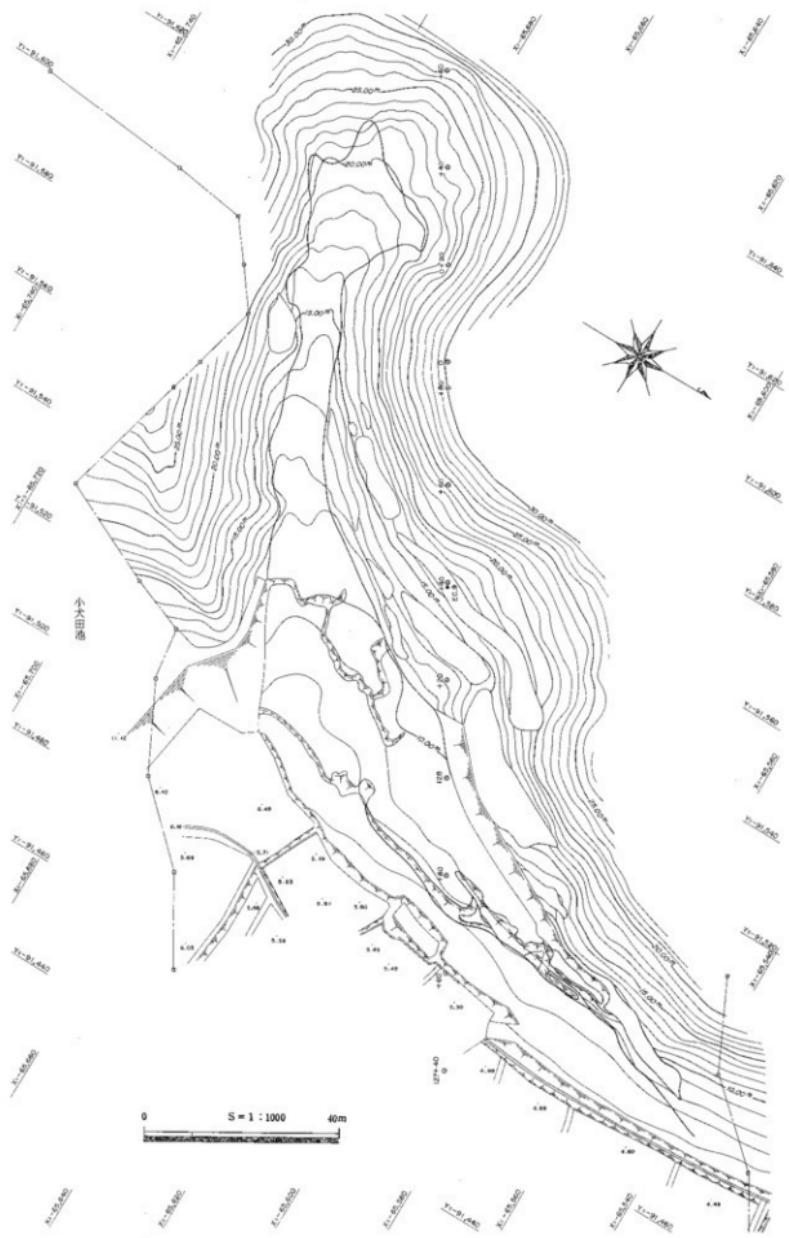
陰田荒神谷遺跡の調査範囲は、平成6年度に米子市教育委員会による事前の試掘調査の結果をもとに決定した。調査面積は9,824m²である。

本調査地は、地形が陰田ヒチリザコ遺跡と酷似しており、テラス状遺構の存在が考えられた。遺跡の時期は、陰田小犬田遺跡a区で出土している流れ込みの遺物より、古墳時代後期から奈良時代が中心となると予測した。現況で、段状地形が確認でき、テラス状遺構（S S - 2～5、7～9）の存在を推定した。また陰田小犬田遺跡と接しているなどらかな傾斜面上にも遺構の存在を予測した。谷奥部のゆるやかな斜面には、広範囲にわたるテラス状遺構の存在が考えられた。調査地南東に位置する尾根（以後「A-1区」と称する）には古墳の存在を予測した。

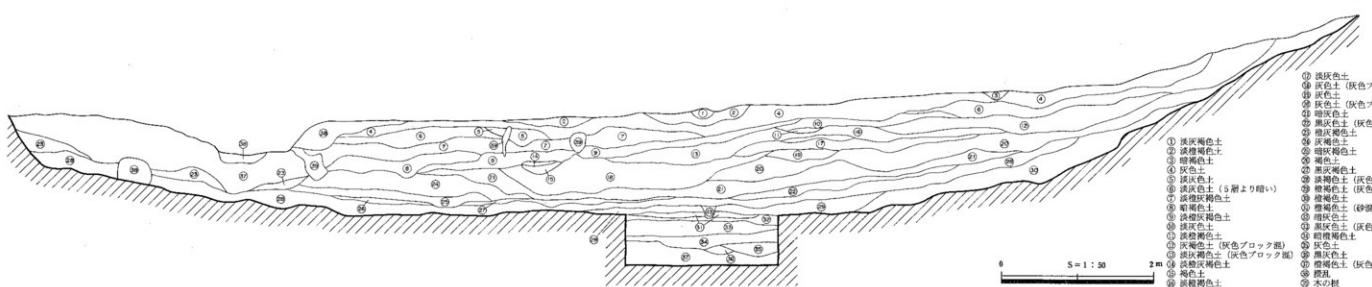
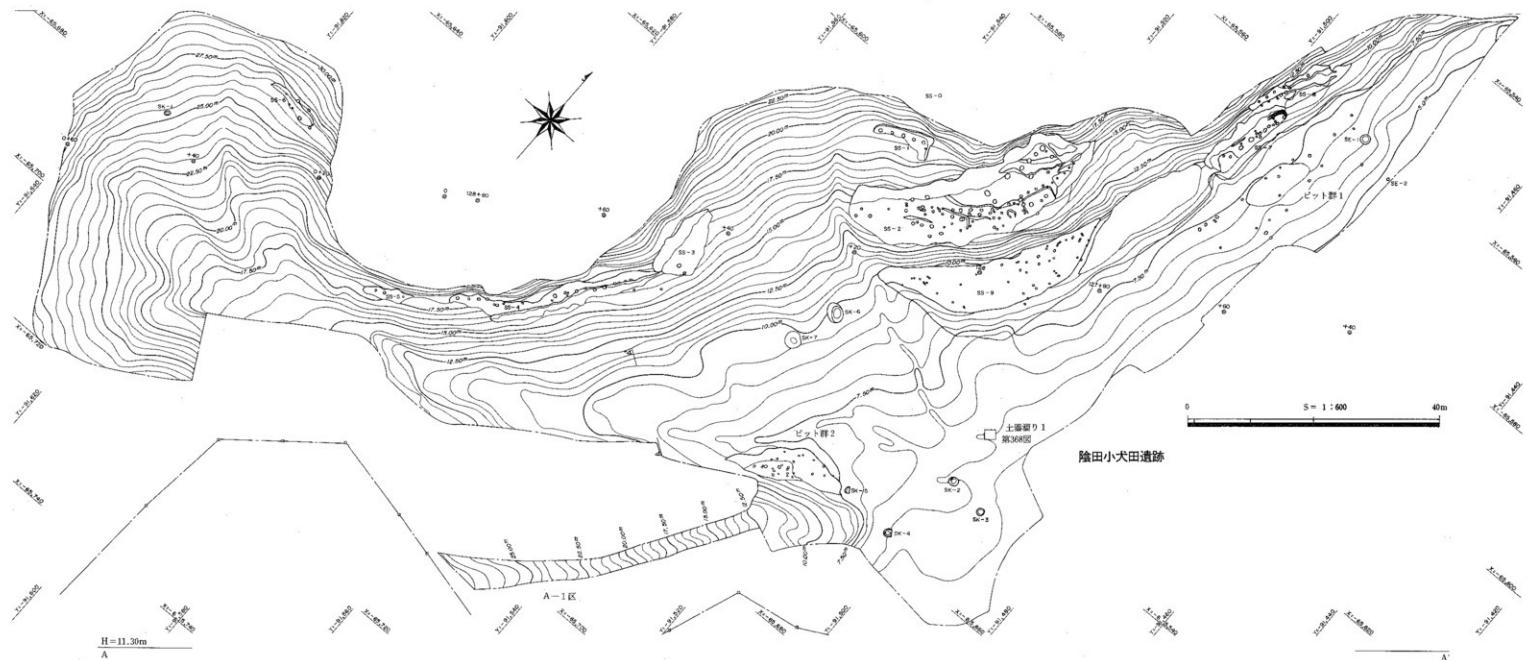
平成7年4月より調査に着手。本遺跡は地形的に出水が多く、用水路への泥水流を防ぐために、沈砂池を設置、泥水を浄化した後、排水した。調査はまず、重機による表土除去を行った。遺構は、荒神谷山の急峻な斜面にテラス状遺構を、斜面が緩やかになる裾部で土坑・土器溜り・ピット群・井戸を検出した。これら遺構は、それぞれ写真撮影、実測を行い、ラジコン・ヘリコプターにより全体写真の撮影を行った。沈砂池および管理上危険箇所の埋め戻しを行い、11月に調査を終えた。

また、本遺跡において、遺構の実測、遺物の実測および取り上げには、トータルシステム（遺跡調査システム SITE II）を用いた。この際に基準となる点（基準点1）[X = -65,568.9121 Y = -91,495.9942]から、任意の杭を増設した。

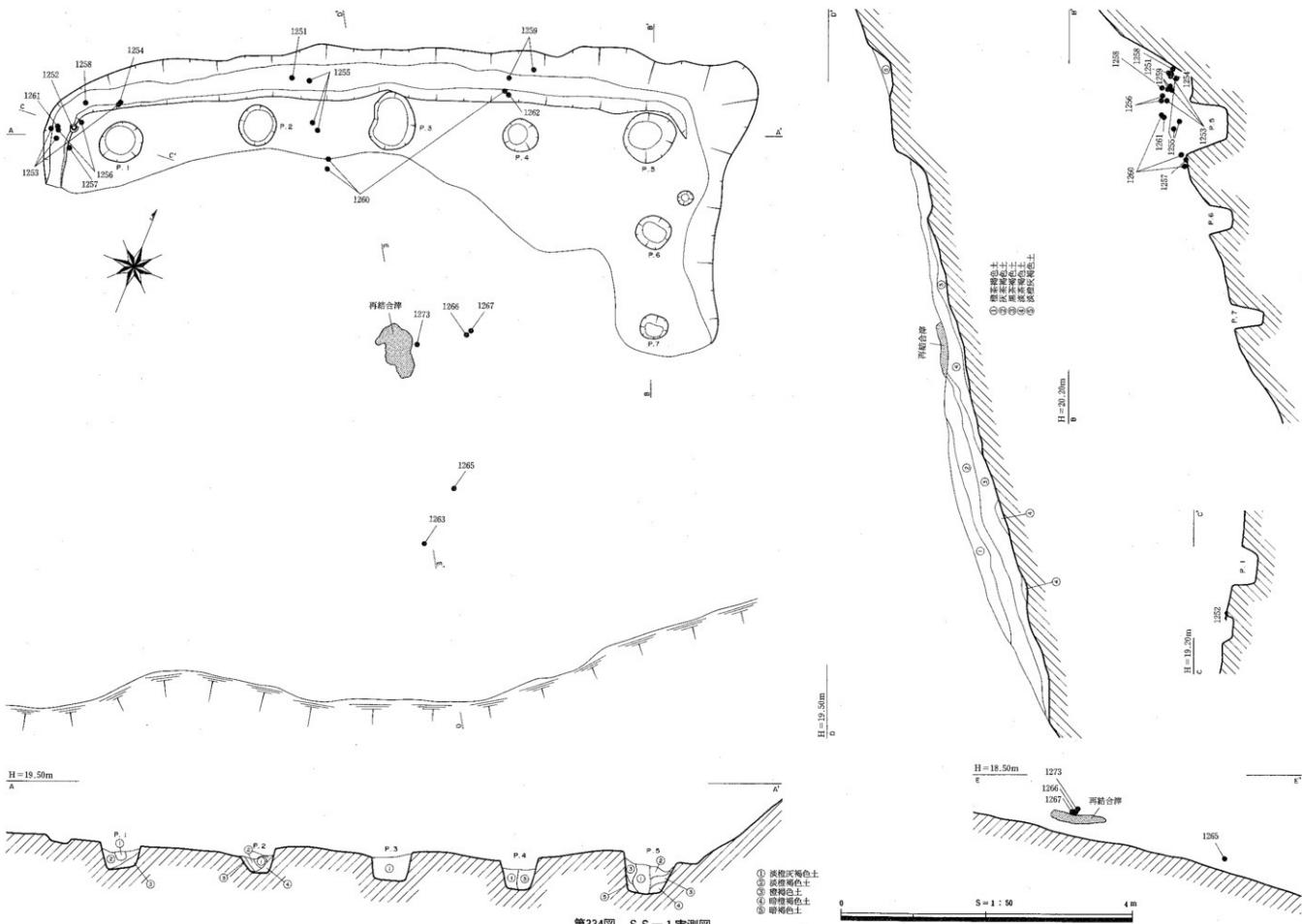
なお、6月に鳥取県立皆生養護学校による体験学習が行われた。また10月には現地説明会を行い、多数の方々に参加していただいた。



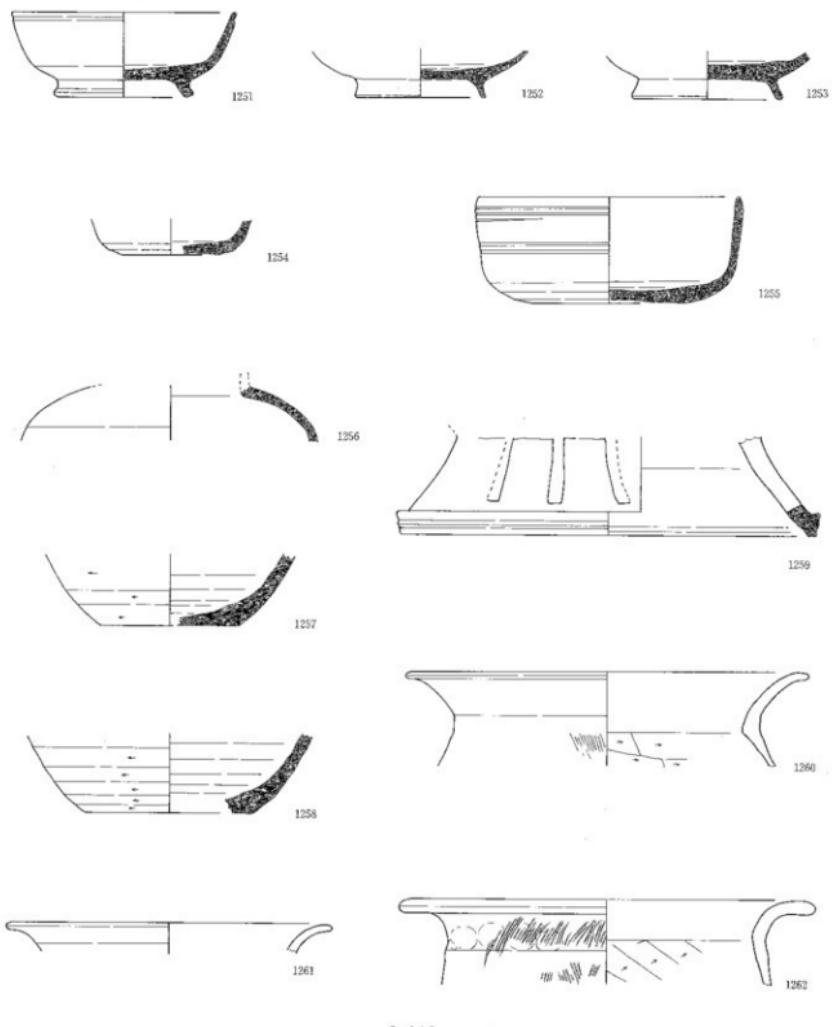
第332図 調査前地形実測図



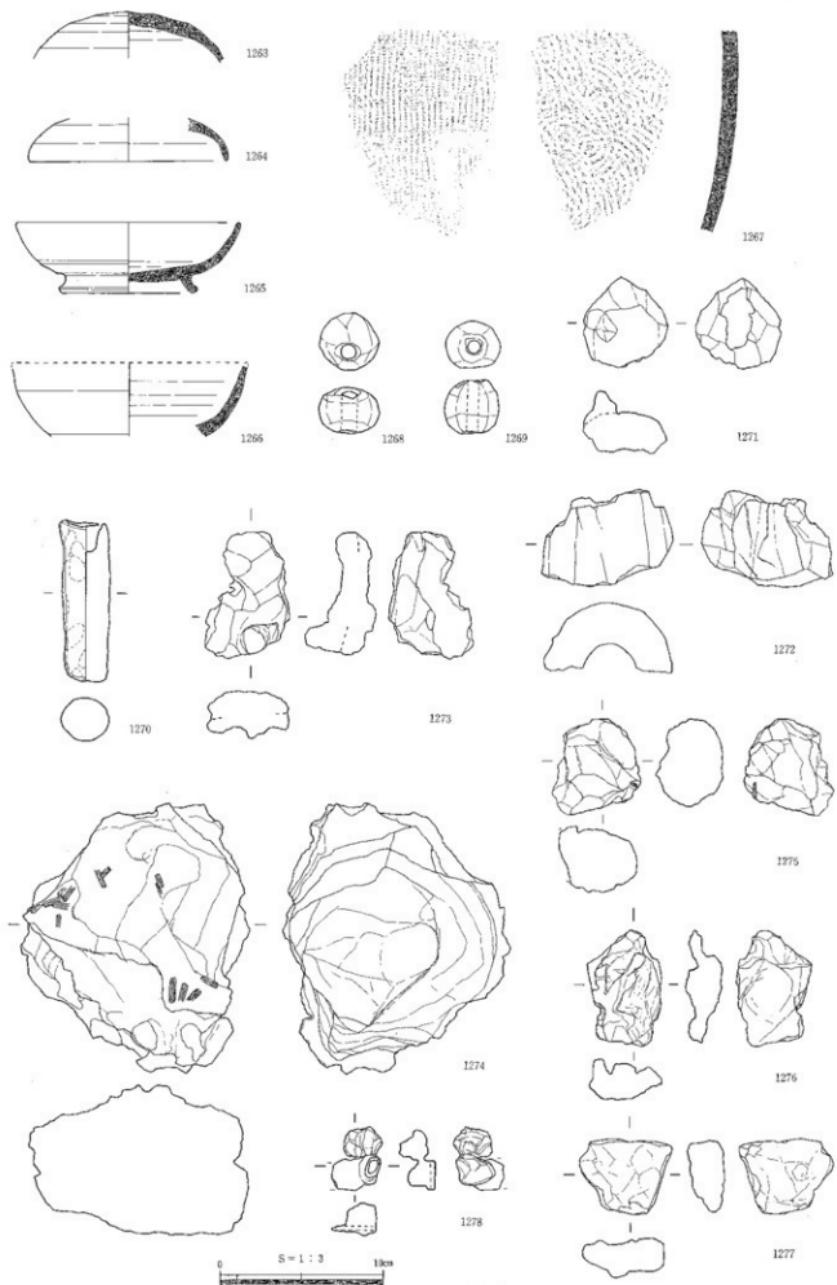
第333図 全体遺構実測図



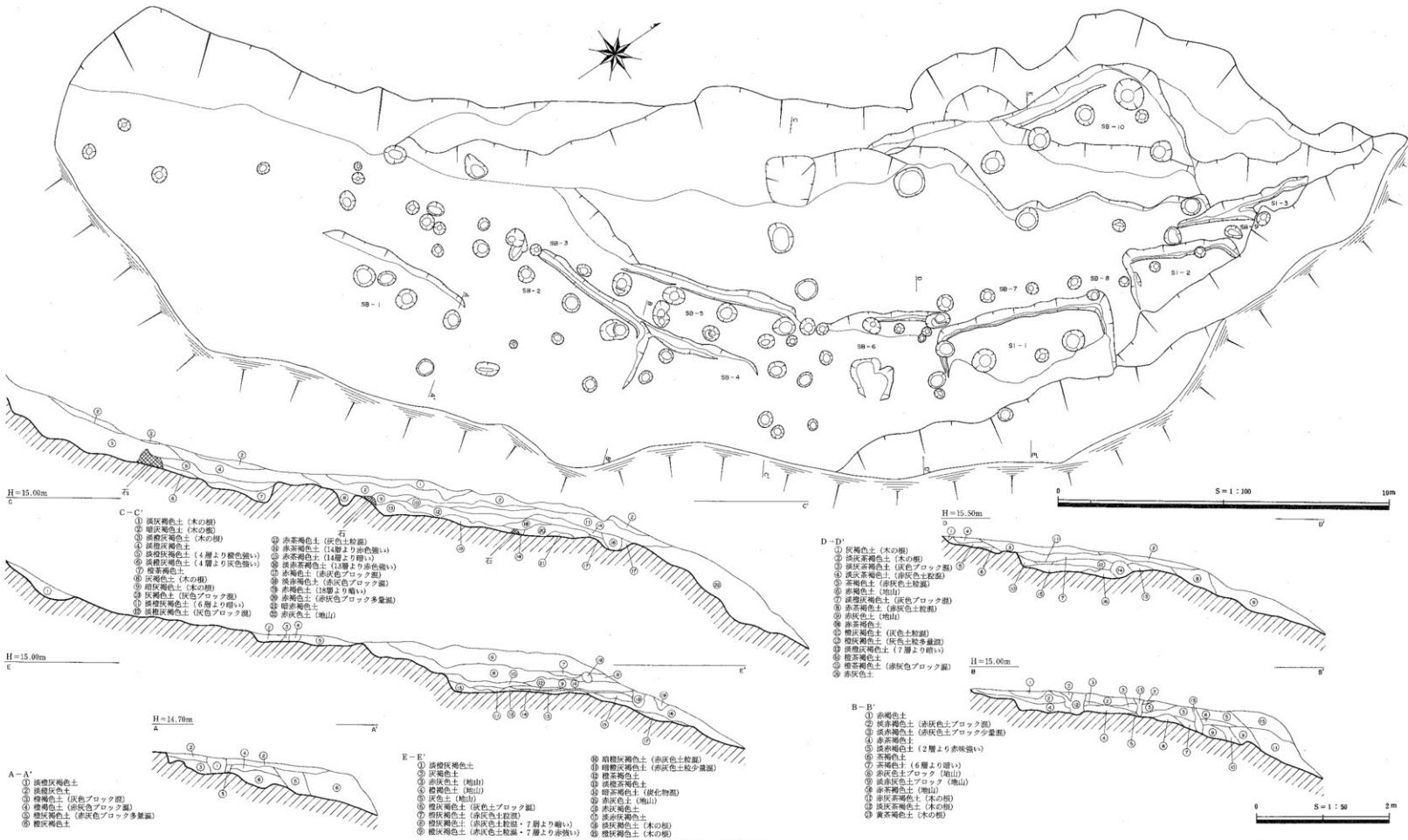
第334図 S S-1 実測図



第335図 SS-1出土遺物実測図



第336図 SS-0 出土遺物実測図



第337図 SS-2 実測図

第3節 遺構と遺物（第335～380図・写真図版68～72、92～94）

1 概要（第334図・写真図版67、92～94）

テラス状遺構は、合計9基を検出した。現地形で確認できたSS-2の上方、比較的なだらかな斜面でSS-1を、調査地北側の荒神谷山東斜面には、SS-7・8を隣接して検出した。谷地形の中間部、谷が狭くなる荒神谷山南側斜面でも急峻な斜面にも犬走状にはしるSS-3～5を検出した。摺鉢状になった谷地形では北側斜面にSS-6が認められたが、周辺の斜面でテラス状遺構は検出できなかった。

土坑は、合計7基検出した。谷奥部の斜面に1基、A-1区の裾部周辺で4基、荒神谷山南側裾部のなだらかな台地状の地形で2基検出した。

SS-1、2、9とSS-3との間の谷地形は、斜面を抉るように直線的に下り、なだらかな裾部で蛇行しながら陰田小犬田遺跡へと続いており、この谷地形の下流付近で土器溜りを1ヶ所検出した。

ピット群は2ヶ所を検出。A-1区の北側裾部と、陰田小犬田遺跡北西部（d区）に接する荒神谷山東側の裾部である。どちらも多数のピットをもつが、規則的な並びは見られないためピット群と称した。後者の付近では、井戸跡を2基検出した。

また、A-1区については前述のとおり、古墳の存在が予想されたために尾根線上に、幅1m、長さ5m前後のトレンチを3ヶ所に設定し、掘り下げたが、表土は薄く、除去すると岩質の地山が露出した。遺構、遺物が確認できなかっただけに拡大延長した。出土遺物は、流出溝津1399と少量の土師器片と須恵器片であった。流出溝津は尾根の頂部付近より出土、この流出溝津が生成された時期は、遺跡の主体的な時期である8世紀代としても差しつかえないものと思われ。その大きさから大型の製鉄炉から排出されたものであることが判断される（註1）。他の遺物もすべて表土中の出土であり、流れ込みの遺物であると判断し、遺構の検出もないため、A-1区の調査を終了した。

調査地を東に走る大きな谷地形については、埋土中に大量の遺物を包含しており、ベルトを残し土層断面観察を行った。堆積状況を窺うことができたが、遺物包含層の最下層で青磁や備前焼の出土が見られ、包含層の形成は中世以降と判断した。

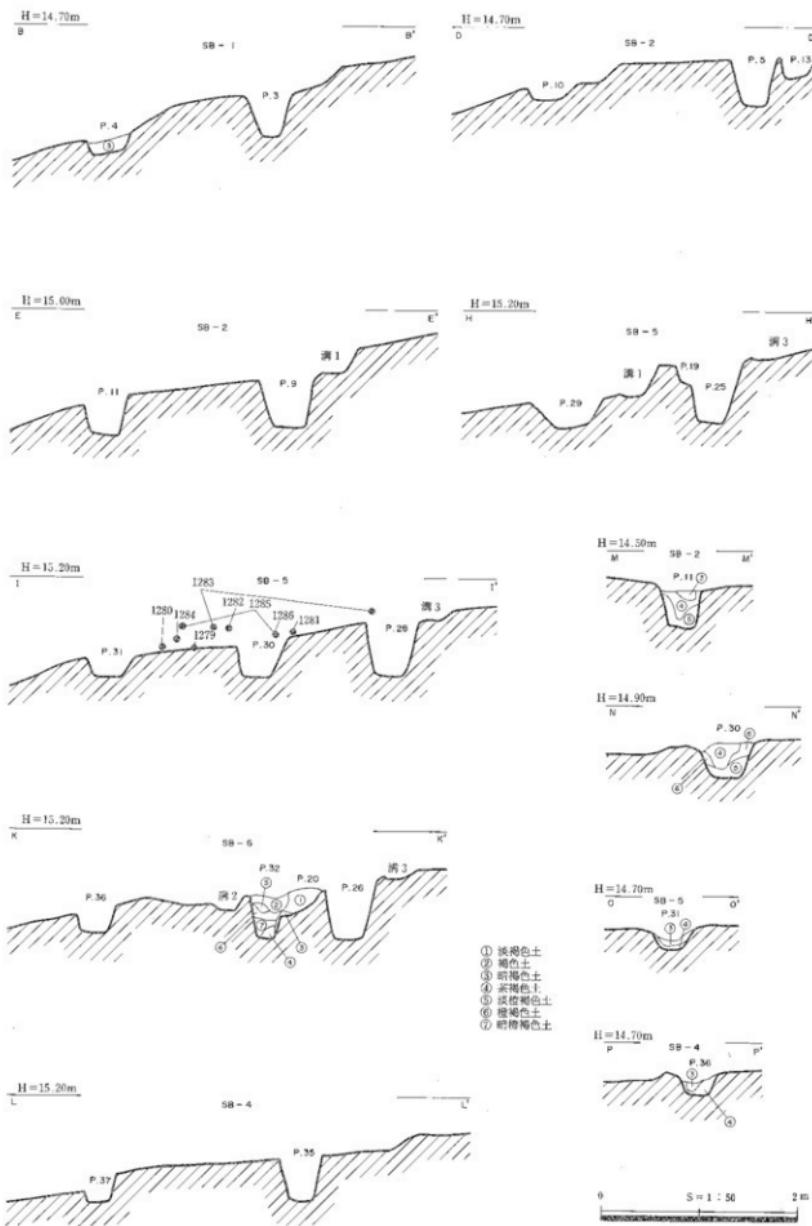
2 古墳時代後期～奈良時代のテラス状遺構（第334～359図・写真図版68～70）

テラス状遺構とは、山の斜面を断面「L」字に削平、平坦面を造成したと思われるものを基本とし、地山を検出しとした。調査は表土除去中から斜面に不自然な傾斜変化点を探し、ベルトおよびトレンチを設定、掘り下げ、検出という手順で進めていった。検出したテラス状遺構には平坦面に多数のピットが検出でき、掘立柱建物や堅穴住居などを構築していたと考えられ、構築物によっては、排水用と考えられる溝を伴うものもみられた。また遺構内の柱穴の中には、深さが非常に浅いものも多く、客土を用いて平坦面を造成したと考えられる。

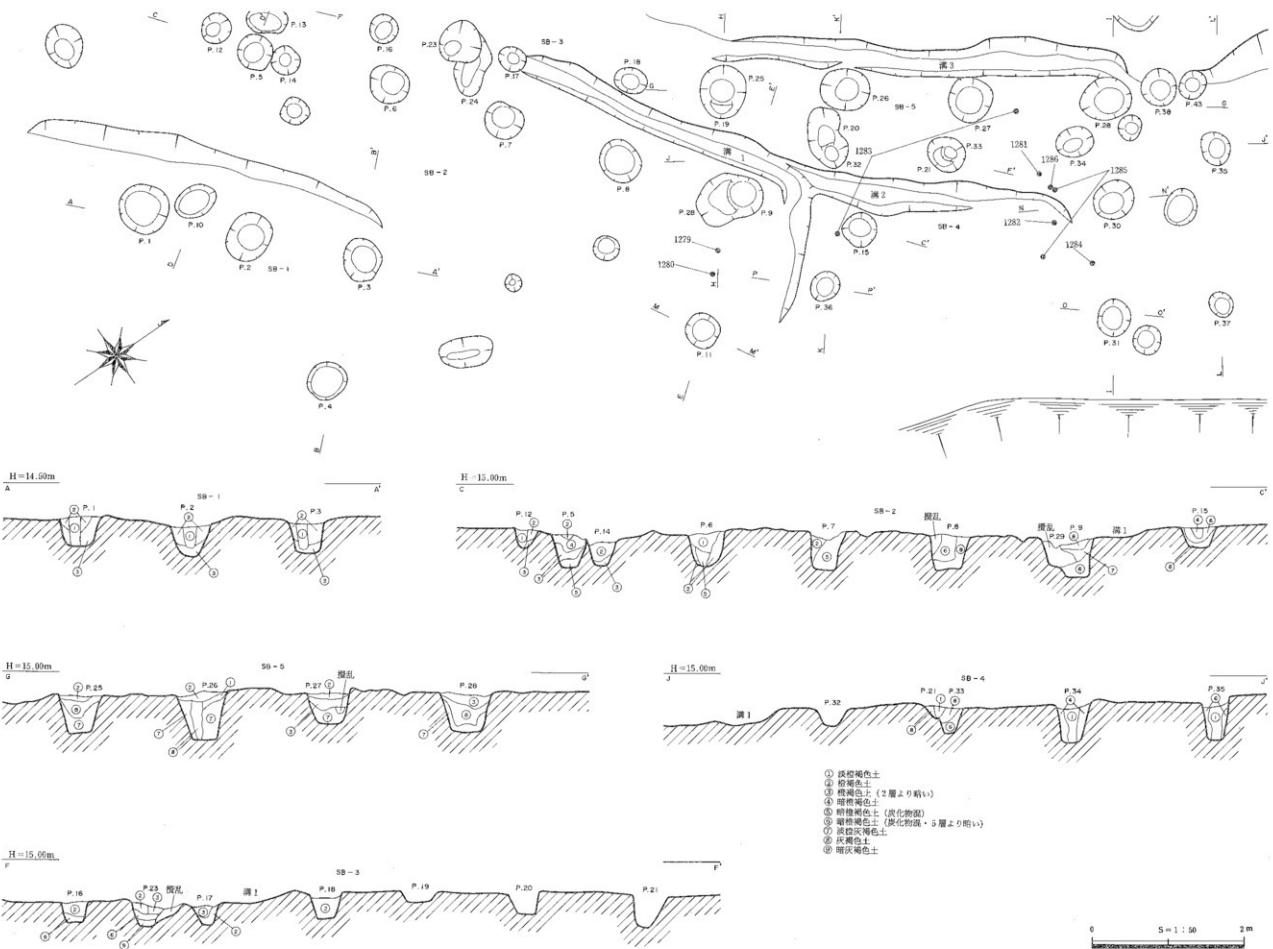
本調査地においてテラス状遺構が立地する斜面はかなり急峻で、SS-6を除き地山のいたるところに固い岩質の陰田流紋岩（註2）が露出している。施設建設に適地とは言い難い。

・SS-1およびSS-0（第334～336図・写真図版68、92）

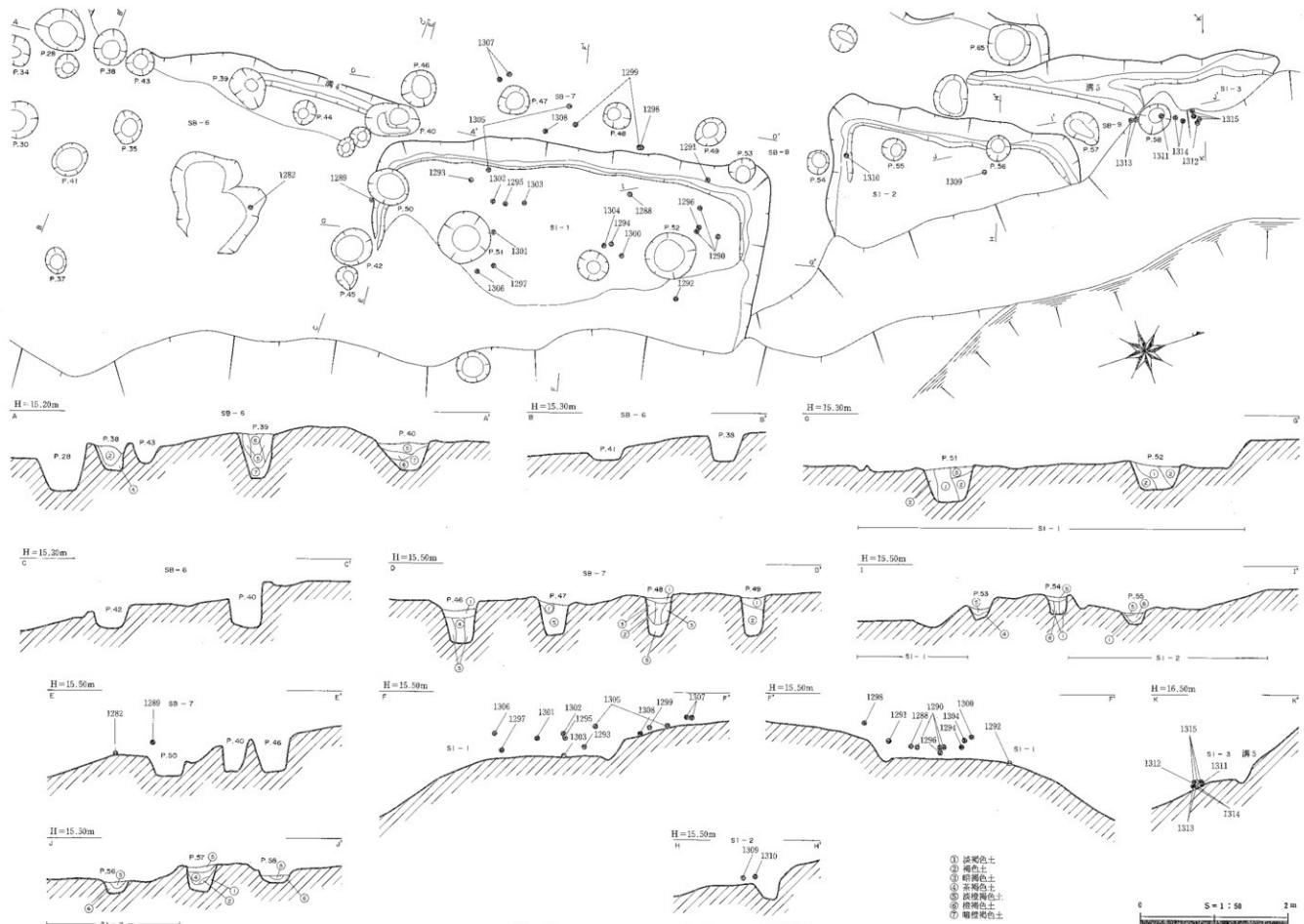
SS-1はSS-2の上方、標高約19mで隣接している。調査地内では比較的なだらかな斜面に位置し、南北約4m、東西約10mを測る。当遺構の中央東より東側は灰色の岩盤、西側は橙茶褐色土の地山で、残存している壁は東隅が最も高く、約1mを測る。岩盤部分と壁面に近い地山部分が遺存していると見られ、遺構内に逆「L」字状に並んだP. 1～7からなる掘立柱建物跡1棟を検出、P. 1～5の壁面側に溝を検出した。溝は長さ約10m、幅50cm前後、深さ約15cmを測る。この掘立柱建物は、壁面の溝がP. 1～5を囲うように「コ」字状を呈していることから、桁行は4間であることがわかる。梁行は2間を確認したが、南側が流失しているため2間以上になる可能性もある。P. 1～4のそれぞれに対応する柱列は検出できなかった。柱穴は径50cm前後、深さ40cm前後を測り、埋土は橙褐色系の土で、柱穴内に遺物は見られなかった。



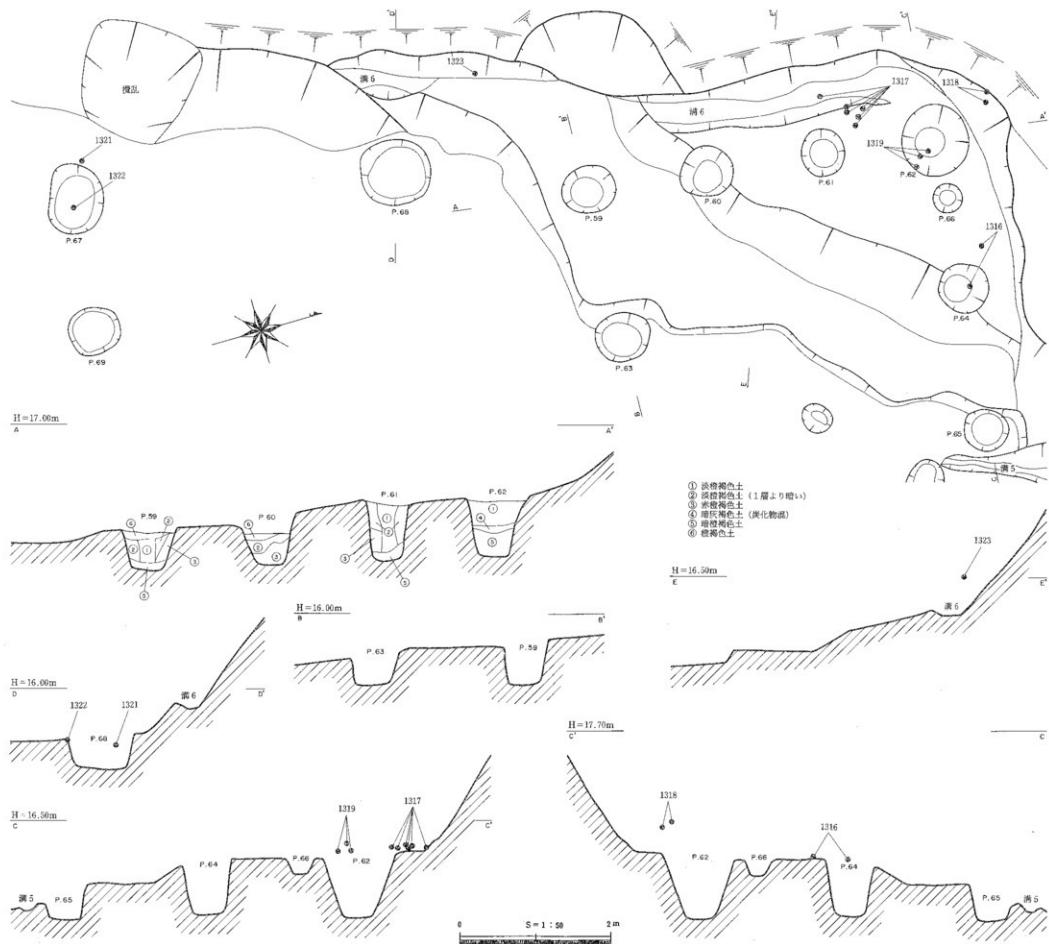
第338図 S S - 2 断面実測図



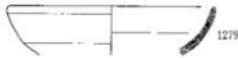
第339図 SS-2・SB-1~5実測図



第340図 SS-2・SB-6~9・S1-1~3 實測図



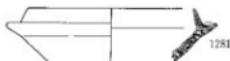
第341図 S S - 2 - S B - 10測定図



1279



1280



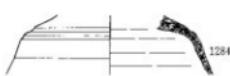
1281



1282



1283



1284



1285



1286



1288



1287



1289



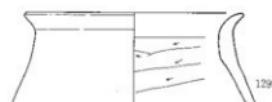
1291



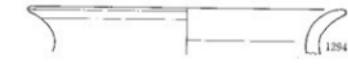
1292



1290



1293



1294



1295



1297

0 S = 1 : 3 10cm

第342圖 SS-2 出土遺物實測圖(1)



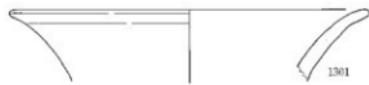
1298



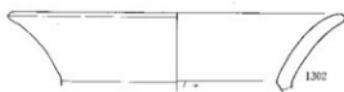
1299



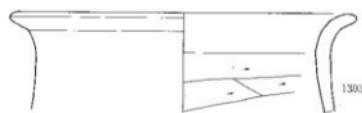
1300



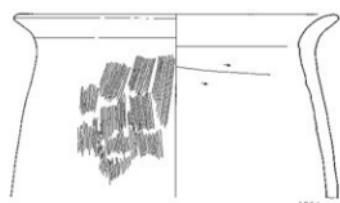
1301



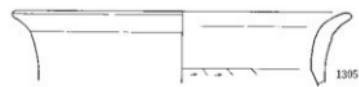
1302



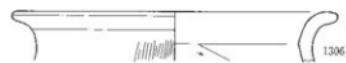
1303



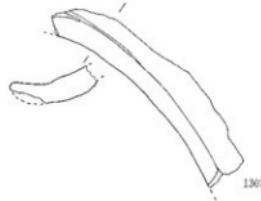
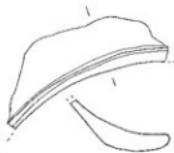
1304



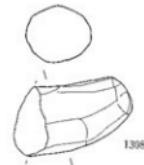
1305



1306



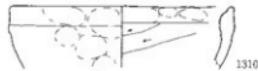
1307



1308



1309



1310

0 S = 1 : 3 10cm

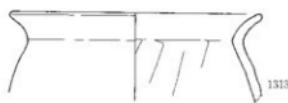
第343図 SS-2 出土遺物実測図2



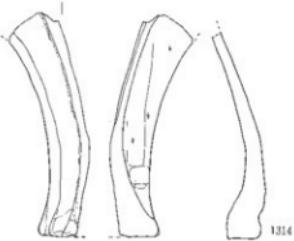
1311



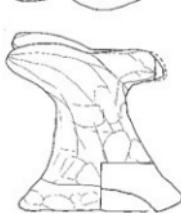
1312



1313



1314



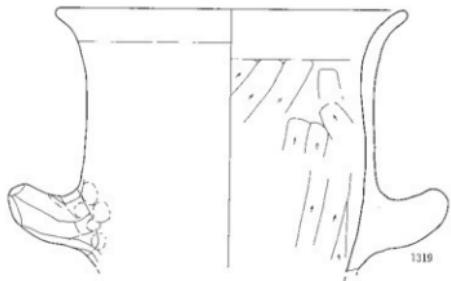
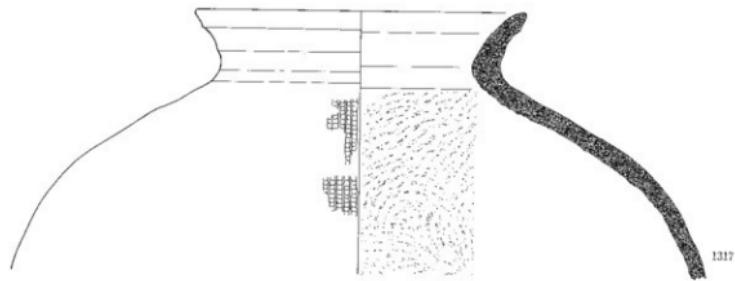
1315



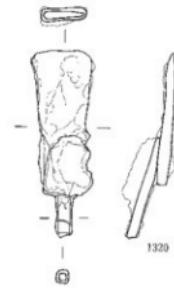
1316



1317



1319



1320

S = 1 : 3
10cm

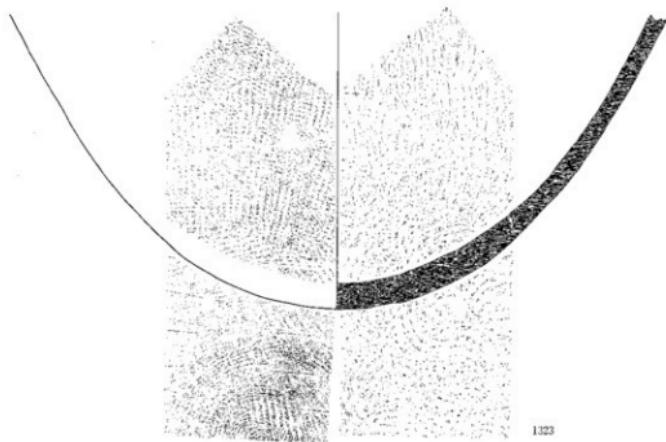
第344图 SS—2出土遗物实测图(3)



1321



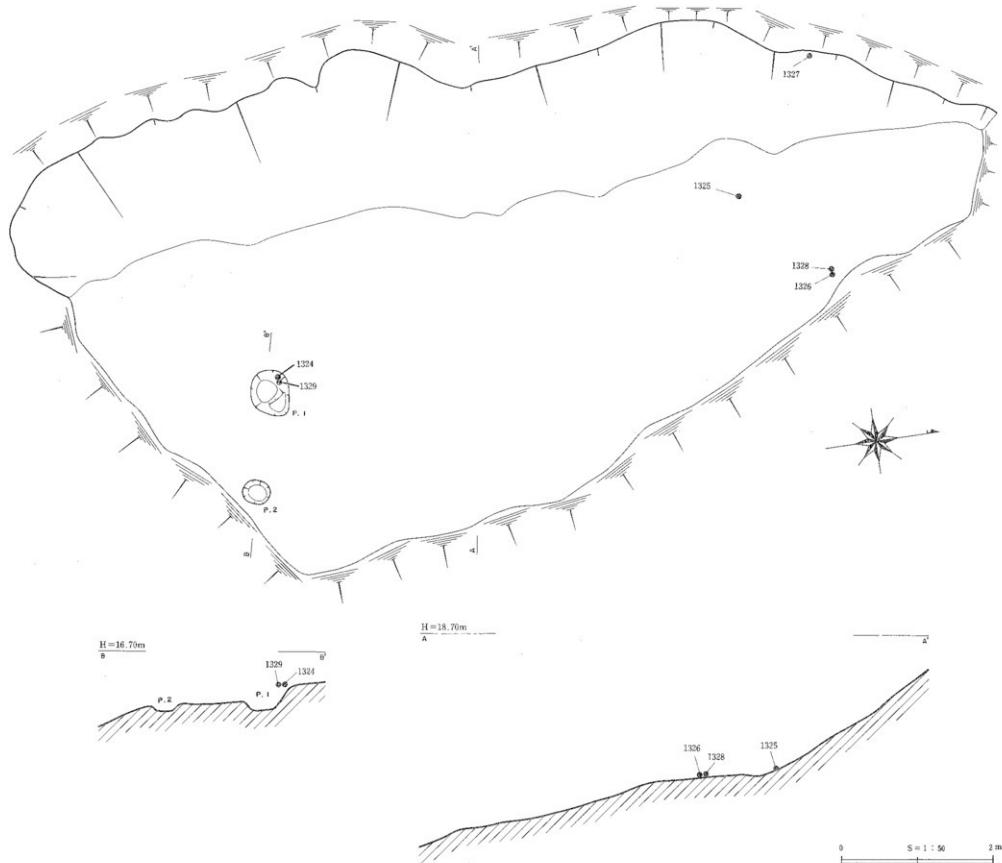
1322

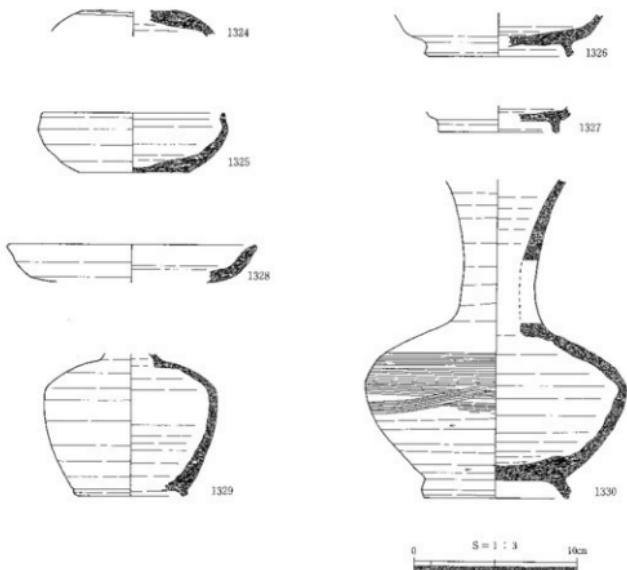


1323

S = 1 : 3
10cm

第345図 SS-2 出土遺物実測図(4)





第347図 S S - 3 出土遺物実測図

S S - 1 に伴う出土遺物は須恵器1251～1259、土師器1260～1262がある。1251～1253は高台の付く壺身、1254は無台の壺身、1255は椀である。1251～1253は底部糸切り後ナデ消している。1256～1258は壺の肩部および底部、1259は円面硯である。1260～1262は甕である。このうち、1252と1257は床直上遺物である。その他の遺物は、埋土中からの出土であるが、壁面際での出土であるため、S S - 1 埋没の時期を示しているものと考える。1251～1253は、8世紀の前葉～中葉に比定される（註3）。

S S - 1 の南側は流出しており、縁辺部に向かってなだらかに下る段状になっている。ここには、上方からの流入土が堆積しており、須恵器壺蓋1263、1264、壺身1265、甕1267、土鍤1268、1269、円柱状土製品1270、輪の羽口1271、1272が混入していた。また出土遺物の中には、椀形鍛冶滓1273～1278を含め、総量約6.6kgが出土しており、中でも80×40～10cm、約4.4kgの再結合滓中に、計356.5gの鍛造剝片と計3.8gの粒状滓（写真図版92）が含まれていた。これら遺物は、S S - 1 の上方に鍛冶構造の存在を示すものであり、S S - 1 の上方には、過去に地滑りのおきた形跡が見られることから、S S - 1 上方に位置していた遺構（S S - 0）が、テラスごと流出した可能性を考える。1265によれば、底部糸切り後ナデ調整しており、7世紀末～8世紀初頭に比定される（註4）。のことからS S - 0の操業はこの前後と考える。また、椀形鍛冶滓や再結合滓、輪の羽口の出土は、鍛冶の操業を示唆するものである。これらは流れ込みの遺物であるため鍛冶操業の様相を明らかにすることはできないが、出土した滓の量から、単発的な鍛冶ではなく、長期にわたって操業されていた可能性が高いと考える（註5）。

また出土した鉄滓の中から6点抽出し、和鋼博物館に金属学的調査をお願いした。出土量は少ないので、製

鍊滓と判断され、製鉄操業を行っていた可能性も考えられる。

・ S S - 2 (第337~345図・写真図版68、92)

S S - 2 は標高約14~15mに位置する。調査前にその存在を確認できたテラス状遺構であり、調査前の地形でも半月状の平坦面を確認できた。表土は非常に薄く、特に北側の壁面部では黒褐色の腐葉土を除去すると灰色の岩盤が露出するほどであった。

検出にあたり、東西方向に土層観察用のベルトを5本設定し、掘り下げを行った。壁面部北側はS S - 1 から続く淡灰色の板状節理が垂直方向に走り、赤灰褐色の岩脈を挟んで南側は茶褐色系の地山である。

検出したS S - 2 の規模は、東西約10m、南北約40mを測り、同時期のテラス状遺構の中で最も広い床面をもつ。また、壁面の高さは最大約3mを測り、遺構内に掘立柱建物跡10棟、竪穴住居跡3棟を検出した。掘立柱建物跡は柱穴が、「L」または「コ」字状に並ぶ柱穴を検出した。S S - 2 は、幾度かのテラスの拡張後、構築物の建て替えを行っていたようで、出土遺物からもその様子が窺える。出土遺物より7世紀前葉から中葉にかけて連続的に構築されたと考えられ、拡張は壁面を掘削しながら奥へ平坦面を広げていったと考えられる。

S B - 1 は、S S - 2 の南側に位置して、柱穴は逆「L」字状に並んだP. 1~4のみを検出し、2間×1間の掘立柱建物跡となるが、P. 1、2に対応する柱穴は検出できなかった。柱穴間距離は1.5m前後を測る。柱穴の規模は径50cm前後、深さは40cm前後を測る。S B - 1 に伴う溝はなく、P. 1~3の西側には高さ約5cmの段がついており、S B - 1 に伴うものと考えるが用途は不明である。S B - 1 に伴う遺物はなく、時期を特定することはできないが、周囲の状況よりS B - 2 構築以前と考える。

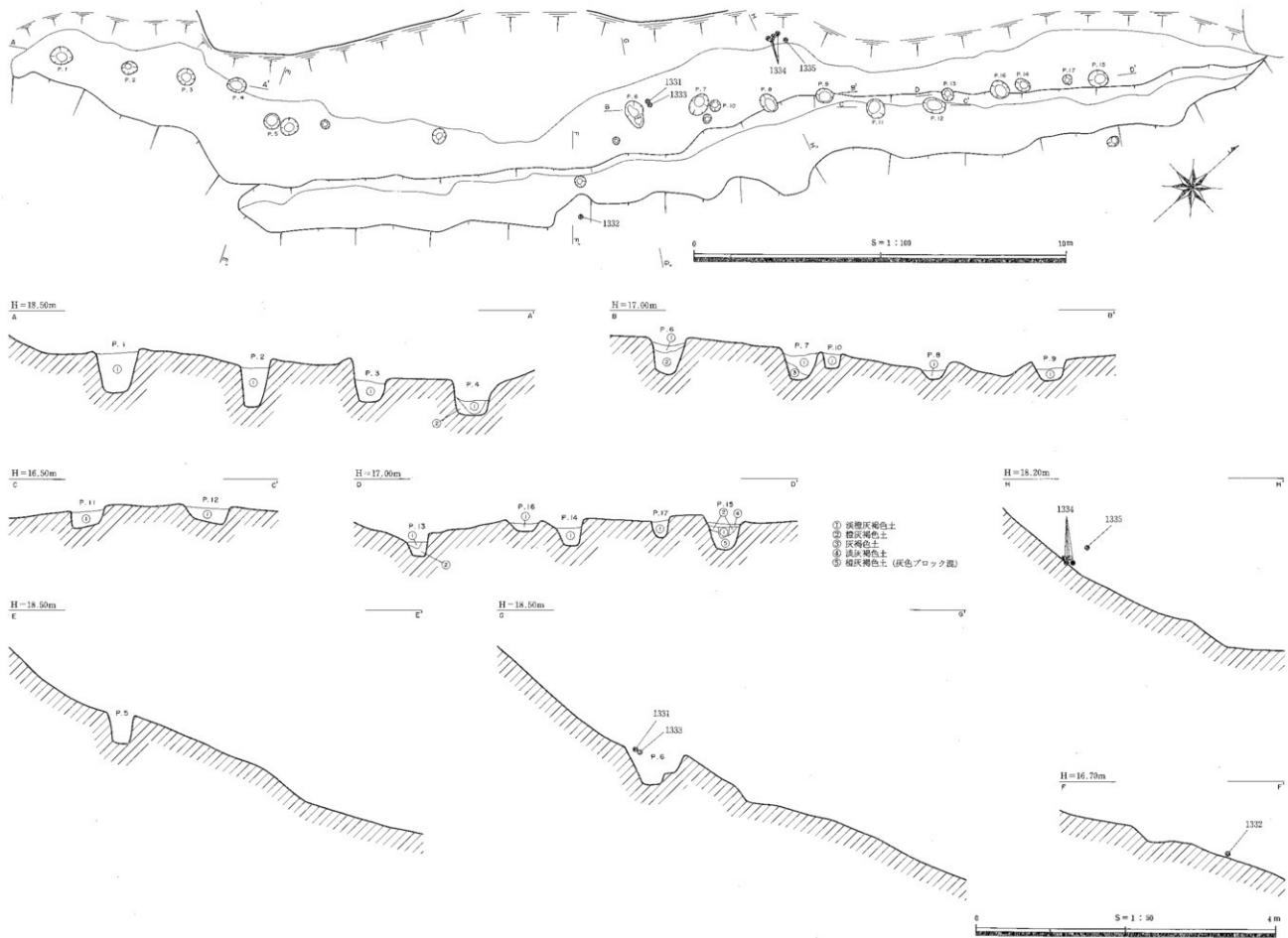
S B - 2 はS B - 1 の北側に位置し、平坦面にP. 5~11が「コ」字状に並び、掘立柱建物の構築が考えられる。柱穴の規模は径50cm前後、深さ50cm前後を測る。柱穴間距離は1.8m前後である。S B - 2 は溝を伴っており、P. 7の壁面側からP. 11の北側まで建物を囲うように逆「L」字状に走る。この溝の規模は長さ約6m、幅約40cm、深さ20cmを測る。溝より壁面側は一段高くなっているが、南側で徐々に低くなり、溝は消える。出土遺物は須恵器壺1279、土鍤1280が埋土中より出土した。P. 6~8に対応するビットが見られないため、S B - 2 は4間×2間以上であったと考える。

S B - 3 はS B - 2 の西に位置する。付近にはいくつものビットが存在するが、P. 16~21が約1.5m間隔で一直線に並ぶ。柱穴の規模は径40cm前後、深さ40cm前後を測り、岩盤にしっかりとした深さで穿ってある。遺構内に時期を示す遺物は検出されなかった。S B - 3 は梁行5間をもつ掘立柱建物跡であると考えるが、これらに対する柱穴は周囲に存在せず、またP. 16~21の規模も比較的小さいことから櫛列の可能性も考えられる。

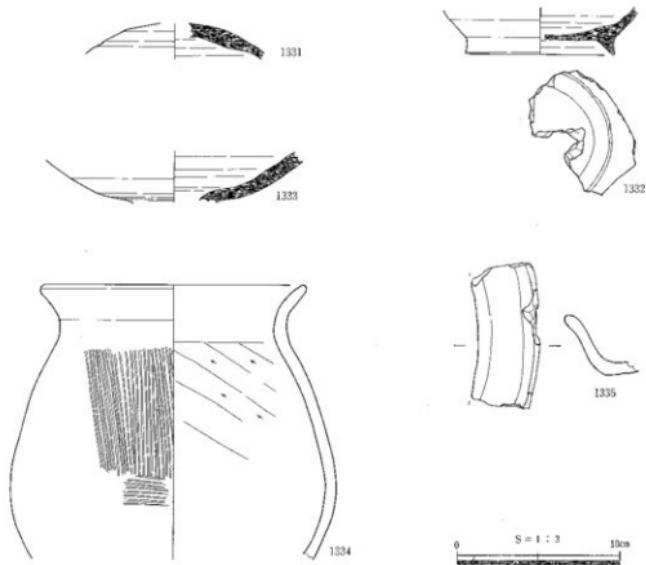
S B - 4、5 は、それぞれP. 32~37、P. 25~31で構成される掘立柱建物跡である。S B - 4 の桁行は、3間であるが、P. 33、34に対応する柱穴が見られないため、梁行は2間以上となる可能性がある。柱穴は径40cm前後、深さ50cm前後を測り、P. 34、35で淡橙褐色の柱痕を見ることができた。柱穴間距離は2m前後を測る。S B - 5 の柱穴は径50cm前後、深さ50cm前後、柱穴間距離は1.7m前後を測り、P. 26には灰褐色の柱痕を見ることができた。またS B - 5 は壁面側に溝を伴っており、長さ約5.5m、幅約50cm、深さ約20cmを測る。S B - 4、5 に伴う遺物は須恵器1281~1286を検出した。1281~1283は立ち上がりの有る壺身、1284は台付碗の脚台部、1285は腕、1286は壺底部である。このうち1281はS B - 4 に、1283はS B - 5 に伴うものであり、いずれも陰田編年(註6)の5~6式(6世紀末~7世紀前葉)に比定される。

S B - 6 はS I - 1 の南側に位置する。周囲には多数のビットを有するがP. 38~42からなる掘立柱建物跡であると考える。柱穴は径50cm前後、深さ60cm、柱穴間距離は2m前後を測る。S B - 6 に伴う遺物として土師器壺1287、かえりをもつ須恵器蓋1289がある。それぞれ縁部または埋土中の出土である。

S B - 7 はS I - 1 の西側に検出したP. 46~50からなる掘立柱建物跡である。柱穴は径50cm前後、深さ60cm前後を測り、柱穴間距離は1.3mを測る。現状で3間×1間であるが、東側が流失しているため梁行が1間以上であると考える。S B - 7 に伴う遺物は、須恵器壺1291、立ち上がりをもつ壺1298、1299、高杯1300、土師器壺1295、1301、1302、1304~1306、竈1307、把手1308である。陰田編年の7式(7世紀中葉)を示しており、遺構



第348図 SS-4 実測図



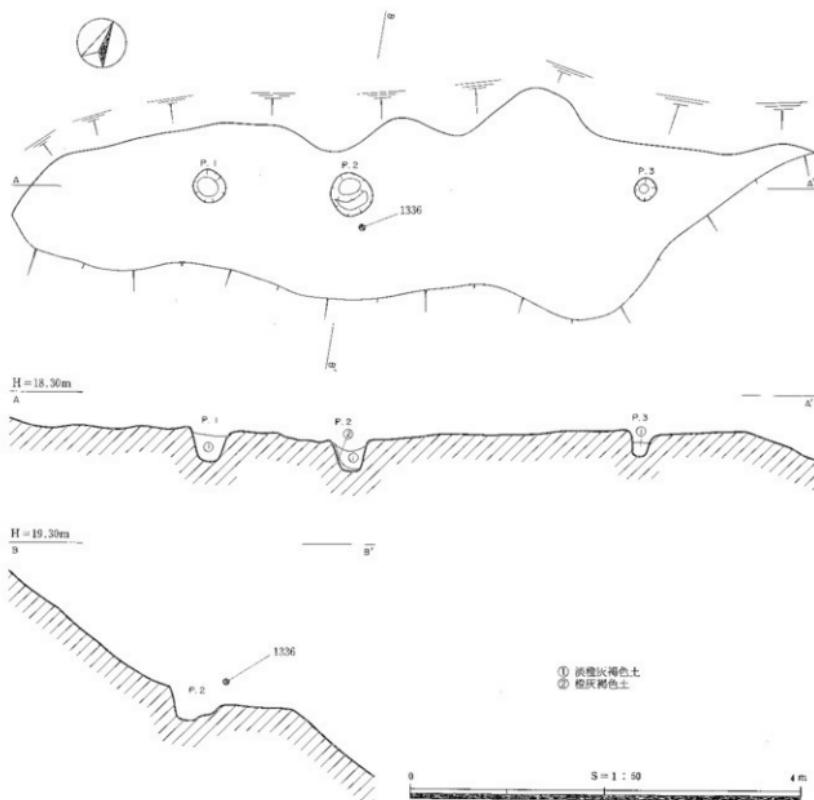
第349図 S S - 4 出土遺物実測図

の時期もこのころの構築と考える。

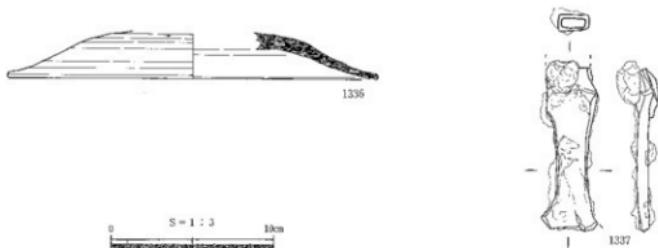
S B - 8、9は、それぞれP. 53~55、P. 56~59からなる掘立柱建物跡と考える。柱穴は径30cm前後、深さ40cm前後、柱穴間距離は1m前後を測る。両者とも、対応する柱穴が検出されなかつこと、他の掘立柱建物跡と比べて柱穴が小さく、柱穴間距離が短いことから、柵列の可能性も考えられる。出土遺物はなく、時期を特定することはできないが、P. 53はS I - 1完掘後に検出されたことからS I - 1構築以前のものと考える。

S B - 10はS S - 2の中でも最終段階の掘立柱建物跡であると考える。S B - 10構築以前のS S - 2は、S B - 3~9の柱穴を結ぶ奥行き約8mのテラス状造構であったと考える。その後北側の壁面を大きく削り取り、S B - 10を構築したものと考える。S B - 10はP. 59~65からなり、P. 59~61に対応する柱穴を検出できなかつたが、3間×2間以上の掘立柱建物跡と考える。柱穴は径70cm前後、深さ80cm前後を測る。このS B - 10は、壁面側に溝を持ち、P. 59付近で流失しているが、P. 68の壁面側まで続いている。またS B - 10の南側は平坦面が広がっており、P. 67~69を検出したが、掘立柱建物跡となるように柱穴を検出することはできなかつた。このP. 67~69周辺の岩盤は非常に硬い岩脈であり、削平し柱穴3個を穿ったものの、この場での掘立柱建物の構築をあきらめ、北側を削平、S B - 10を構築したものと考える。

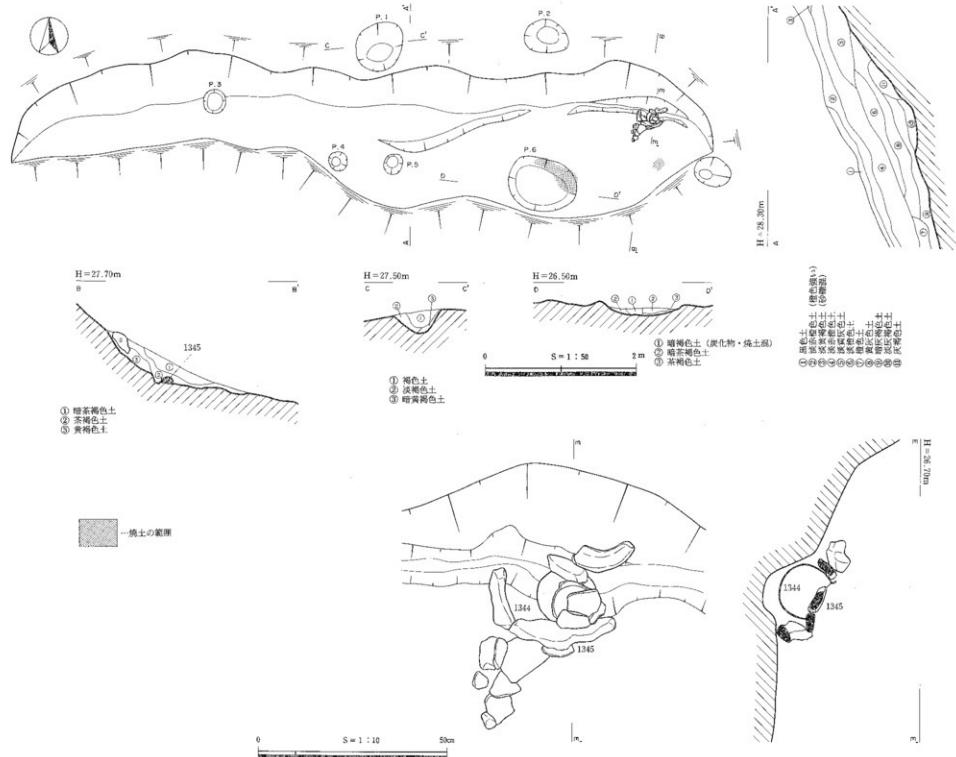
出土遺物は須恵器1316、1317、1321~1323、土師器甕1318、櫃1319、鉄鎌1320がある。1316は壺、1317、1322、1323は甕、1321は高坏である。1320は2個体が銹着したものである。1318、1323を除き、ほぼ床面直上遺物である。



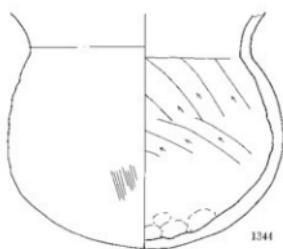
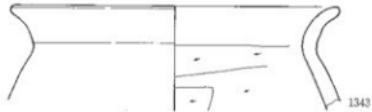
第350図 SS-5 実測図



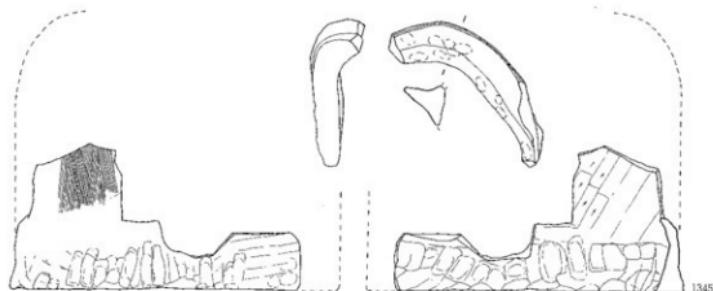
第351図 SS-5 出土遺物実測図



第352図 SS-6 実測図



6 S = 1 : 3 1km



0 S = 1 : 6 2km

第353図 SS-6 出土遺物実測図

S I - 1 は S B - 7 の東側に位置する方形の竪穴住居跡である。東側を流失しており、残存する規模は東西約3m、南北約5mを測り、床面の周囲に幅約10cm、深さ約5cmの溝をもつ。柱穴はP. 51、52を検出し、柱穴間距離は約3mを測る。4本柱と考えるが、東側は流失のため遺存していなかった。出土遺物は須恵器壺蓋1288、壺身1290、甕1292、土師器甕1293、1294、1303、鐵1296、土鍾1297である。1290は陰田編年の7式（7世紀中葉）に比定される。土層の断面観察よりS I - 1 売絶後、S B - 7 を構築したものと考える。

S I - 2 は S I - 1 の北側で検出した竪穴住居跡である。東側が流失しており、東西約1.5m、南北約3mを測る。壁面に側溝がめぐり、ややいびつな隅丸方形の竪穴住居であったと考える。柱穴となるピットは検出されなかった。出土遺物は須恵器壺蓋1309、土師器碗1310がある。S I - 2 の埋土は単層で、S I - 1 の埋土の第1層と同じものであったため、S I - 1 売絶後の構築を考える。

S I - 3 は、S S - 2 の北側に位置している。縁辺部の崩落が激しく、西側の側溝のみを検出した。側溝は長さ約4m、幅約40cm、深さ約5cmを測り、硬い岩盤にしっかりと穿ってある。遺物はつまみをもつ須恵器壺蓋1311、土師器甕1312、1313、甕1314、支脚1315がほぼ床直上で出土しており、遺構の時期を特定できるものと考える。1311は、陰田編年の7～8式（7世紀中葉～後葉）に比定される。

S S - 2 では、計約1kgの鉄滓が出土している。いずれも遺構南西部、S S - 1 直下の埋土中から出土しており、上方に位置していたS S - 0 からの流れ込みと判断する。このうち2点を抽出し、和鋼博物館に金属学的調査をお願いし、製錬滓と判断された。

・ S S - 3～5 (第346～351図・写真図版68、93)

S S - 3～5 は、調査地内で最も急峻な斜面の標高17～19mに隣接して立地する。S S - 3 は、北東に向かって地形が張り出し斜面が緩やかになる場所に掘り込まれたテラス状遺構で、規模は東西約4.5m、南北約12mを測り、比較的奥行きの広いテラスとなっている。残存している壁面の高さは約1.3mを測る。遺構は灰色の岩盤に立地しており、床面は凹凸が激しい。床面に2個のピットをもち、規模は径約40cm、深さ15cmを測る。遺構内に2個の柱穴間距離は、約1.4mを測るが、周囲に対応するピットがみられない。S S - 3 は明確に建物を構築していたピットを検出することがなく、一連のテラス状遺構とは形態が異なるように思えるが、床面は硬い岩盤であり、壁面部と縁辺部には高低差が約1.5mであることから客土を用いた可能性もある。出土遺物は、須恵器蓋1324、壺身1325、高台の付く壺身1326、1327、皿1328、水瓶1329、長頸壺1330がある。1325、1326には底部に回転糸切りが観察される。1327の調整は不明。遺物は陰田編年10式（8世紀後半）に比定される。

S S - 4 は、東西約32m、南北約6mを測る狭長な形態を呈している。犬走状の本遺構の床面は、南側で流失が激しく、壁面部と縁辺部とは高低差が1m前後を測る。遺構内に24個のピットをもち、そのうちP. 1～4からなるS B - 1、P. 6～9からなるS B - 2、P. 13～15からなるS B - 3 を検出した。いずれも対応する柱穴が流失しているが、柱穴間距離が1.8～2.0mを測り、一直線上に並ぶことから掘立柱建物跡であると考える。柱穴は径40cm前後、深さ50cm前後を測り、硬い岩盤にしっかりと穿ってある。出土遺物は須恵器蓋1331、高台の付く壺身1332、器種不明の土器1333、土師器甕1334、甕の底1335がある。1332の底部には静止糸切りが観察される。これら遺物は陰田編年9式（7世紀末～8世紀初頭）に比定される。

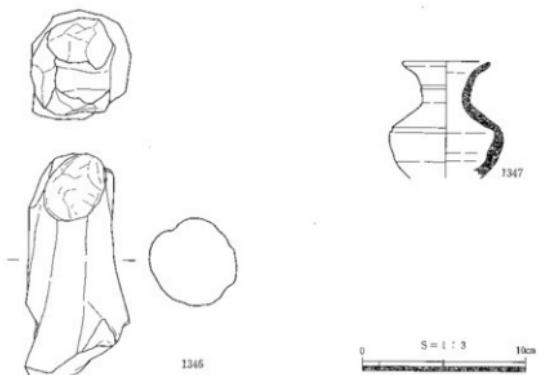
S S - 5 は、南側を流失するが、東西約8m、南北約1.5m、壁面の高さ約1mを測るテラス状遺構である。遺構内に3個のピットを持つが、明確に掘立柱建物跡となる柱穴は検出できなかった。出土遺物は、須恵器蓋1336、鉄製塗装工具1377がある。1336は陰田編年9式以降と考える。

・ S S - 6 (第352、353図・写真図版68、69、93)

谷奥部の荒神谷山南側斜面、標高約24.7mに立地するS S - 6 は、橙褐色の地山を造成したテラス状遺構である。南側が流失しているが、東西約9m、南北約1.5mの狭長な床面を検出。壁面東側には、長さ約4mの溝が遺存している。遺構内に7個のピットを持つが、建物の構造は不明である。P. 6の北東側は火を受けた形跡が見られ、埋土中に炭化物および焼土を含んでいる。遺構内北東隅の溝より、土師器甕1344と甕1345が折り重なるように出土した。壁面のほぼ床直上遺物ではあり遺構に伴うものと考えるが、周囲に火を受けた形跡はない。こ



第354図 SS-7 対測図



第355図 SS-7 出土遺物実測図

の他、須恵器環身1338、脚台1339、甕1340、壺1341、1342、土師器壺1343が埋土中より出土している。また遺構内より10点、合計約150gの鉄滓が出土した。内2点を抽出し、和鋼博物館に金属学的調査をお願いし、2点とも製鍊滓と判断された。

SS-6が立地する周囲は、谷部が比較的なだらかな摺鉢状になっており、この斜面上に同様の遺構の存在が考えられたが、他にテラス状遺構を見ることはなかった。前述のとおり、谷部の包含層より出土した大量の遺物を考えると、かつてここにテラス状遺構を造成していたと思われるが、地滑りによりテラスごと流失したと考えられる。

・ SS-7 (第354-355図・写真図版69、70)

SS-7は、灰色の硬い岩盤を穿って立地する、本遺跡の中で一番低い位置にあるテラス状遺構である。標高は約9m、西側はSS-8、東側はピット群1と隣接する。黒色系の非常に薄い表土を除去すると、東西約2m、南北約14mの犬走状の狭長な床面を検出した。縁辺部の流失が考えられる。残存している壁面の高さは約2mを測り、大掛かりな造成作業を行ったことが窺える。遺構内にピット21個をもち、径50cm前後、深さ60cm前後を測る。このしっかりと穿ったピットは直線上に並び、この内P. 3、4、8、13、16、21からなる5間の掘立柱建物跡を検出した。掘立柱建物跡の柱穴間距離は2m前後を測るが、対応するピット列は検出できなかった。また壁面裏部に延べ約6.5mの溝を検出した。この溝は構築物に伴う、排水用のものであると考える。埋土中より支脚1346、須恵器小型壺1347を検出した。

・ SS-8 (第356図・写真図版69、70)

SS-8は、SS-7の上方標高約11m付近に隣接する。表土を除去するとすぐに犬走状の狭長な遺構面にあたり、検出したテラス状遺構の規模は東西約3m、南北約15mを測る。床面は、高低差が大きく、壁面部と縁辺部で約1mと緩やかな斜面となっている。残存している壁高は約1.6mを測る。遺構内に12個のピットをもつが、そのほとんどが南側に集中している。北側は明確なテラス状遺構とはいえないが、床面を凸凹させながら削平した平坦面が続く。P. 1-P. 8で3間×1間の掘立柱建物を構築していたと考える。P. 1-P. 8の埋土は淡橙灰褐色土の単層が主であり、規模は径30cm前後、深さは20cm前後を測る。ピットが浅いこと、床面の凹凸が

はげしいことから客土を盛っていたと考えられる。柱穴間距離は桁行で2.5m前後、梁行で1.2m前後を測る。

3 中世以降のテラス状遺構（SS-9）（第357～359図・写真図版68）

SS-9はSS-2の下方、標高約10mに位置している。中程で緩やかな段をもち北側が若干低くなるが、東西約7m、南北約50mの長大なテラス状遺構を呈している。壁面の高さは約5mを測り、上方に存在するSS-2の縁辺部を削り、かなり大掛かりな造成作業であったことがわかる。

表土は薄く、除去するとすぐに赤橙灰色の遺構面にあたる。

遺構内には55個のピットを検出したがすべて南側に集中しており、ピットの規模はさまざまに幅15～40cm、深さ10～40cmを測り、前述のSS-1～8のもつそれより極めて小さい。

また掘立柱建物になるような規則性をもった並びは見られなかったが、縁辺部のピットは、柱穴間距離は不規則ながら縁辺部に沿うように穿ってあり、柵列となる可能性があるが用途は不明である。

テラス上より摺鉢1348、銅鏡1349、1350、五輪塔1351が出土しており、1348はVA期（16世紀前半）に比定される備前焼である。1349は「元豐通宝」（北宋・初鉄1078年）と読める。五輪塔は空輪と風輪が一つになったものである。

4 土坑（SK-1～7）（第360～367図・写真図版70、71、93）

• SK-1（第360図・写真図版70）

SK-1は、摺鉢状になった谷奥、標高約25mのなだらかな斜面に位置する。形態は検出面、底面とも不正な楕円形を呈しており、規模は長軸約0.8m、短軸約0.7m、残存する深さは約0.2mを測る。埋土は4層に分けられる。検出面で炭化物を多く含む黒褐色土が広がっており、銀冶遺構に伴う製炭窯の可能性を考えたが、遺構の周囲、壁面及び底面に焼成を受けた形跡はみられず、流入したものと判断した。埋土中に遺物はなく、時期および性格は不明である。

• SK-2～4（第361～363図・写真図版70、71）

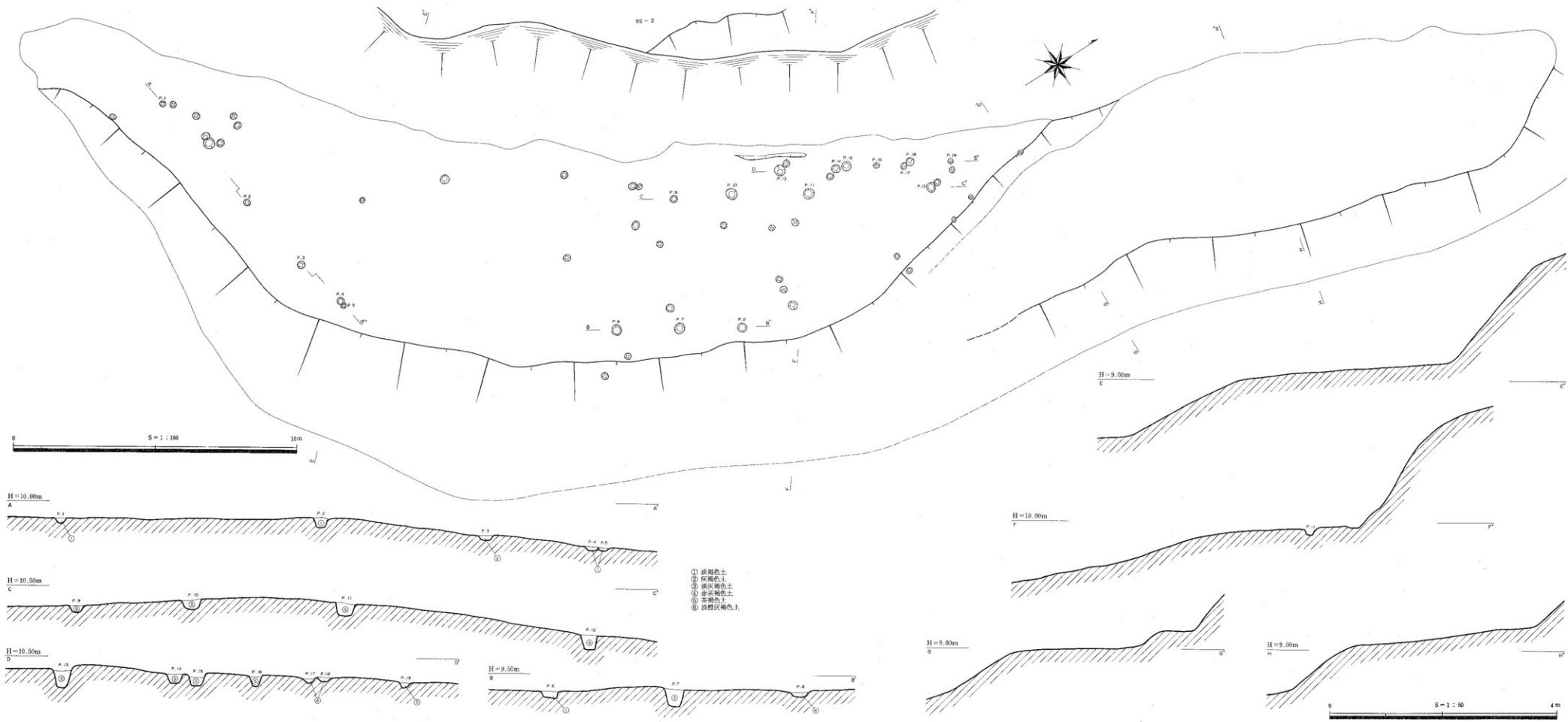
SK-2～4は、A-1区東端付近、標高5.8～6.4mの低湿地に位置する。SK-2の形態は、検出面で不正な五角形、底面は隅丸の方形を呈し、西側に狭い段をもつ。規模は、東西・南北とも約1.5mを、残存する深さは最大約0.15mを測る。SK-3の形態は、検出面、底面とも不正な円形を呈している。規模は、東西・南北とも約1.1mを測り、残存する深さは最大約0.15mである。SK-2、3の埋土は灰色ブロックが混じる黒褐色粘質土の単層で、埋土中に須恵器および土師器の小片が出土したが、遺構の時期を特定できるものではなかった。これら遺構から北へ約10m下ったところに、陰田小犬田遺跡より検出したSK-1～3が存在する。位置的にも近く、立地条件も似ており、また埋土も類似することから、SK-2、3は、陰田小犬田遺跡より検出したSK-1～3と時期的に近いものであると考えるが、性格は不明である。SK-4は、SK-2、3とは形態が異なっており、灰褐色の岩盤に掘り込まれている。形態は、不正な四角形を呈し、さらに底面に楕円形のピットが穿ってある。規模は、検出面で東西約1.3m、南北約1.5m、底面のピットは長軸約0.7m、短軸約0.3mを測る。埋土は黒褐色であるが、粘質土ではなくヘドロ状の、極めて流動性の高い泥が流入している。埋土中に遺物もなく、時期、性格とも不明である。

• SK-5（第364図）

SK-5は、A-1区の北側裾部で検出した。南側に隣接するピット群2よりなだらかに下る標高約8mの台地状の地形に位置している。東側は流失しており、西側を残すのみの検出であったが、遺存部分から隅丸の四角形、もしくは長方形になると考えられる。規模は、長辺約1.2m、短辺約0.6mを測り、遺存している深さは約10cmである。埋土は灰茶褐色土の単層であり、埋土中に遺物はなかった。



第356図 SS-8 実測図



第357図 SS-9実測図



第358図 S S-9 出土遺物実測図(1)

・SK-6、7 (第365~367図・写真図版93)

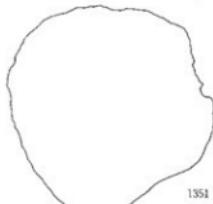
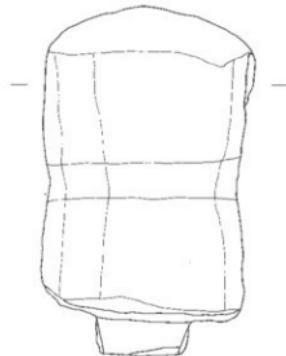
SK-6、7は、SS-3と9の中間、荒神谷山南西裾部の南へながら下る段丘上に立地している。SK-6は標高約9.8mに位置する。形態は検出面、底面とも不整な円形を呈し、規模は、径約2.7mを測り、遺存している深さは約50cmである。埋土は2層に分層できる。埋土中に遺物は見られなかった。

SK-6より北へ約8mのところに、ほぼ同規模のSK-7が隣接する。形態は検出面、底面とも不整な横円形を呈しており、規模は、長軸約3.2m、短軸約2.4m、遺存している深さは約30cmを測る。埋土は5層に分層できる。遺構内より備前焼の壺鉢1352、1353を検出した。IV B期(15世紀後半~16世紀初頭)に比定される。また規模、埋土が比較的よく似ていることからSK-6とSK-7は同時期のものと考えられるが、性格は不明である。

5 土器溜り (第368、369図・写真図版71、94)

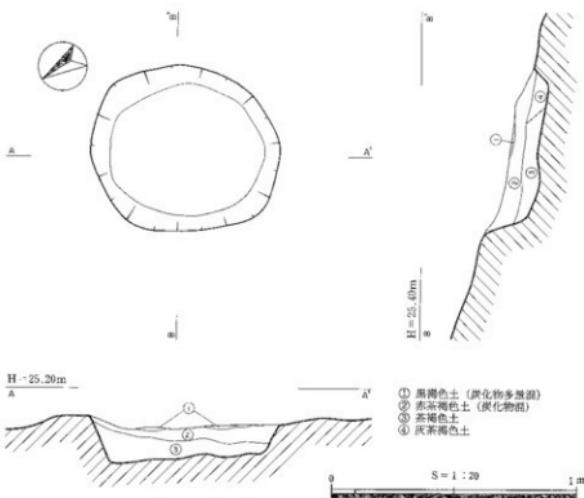
SS-1西側の谷地形の堆積土中、標高約6m付近で土器溜りを検出した。遺物は、硬く綿まとった灰褐色の堆積土中に折り重なるように出土した。図化できた遺物は1354~1366の13個体の土師器である。

1354~1361は甕である。出土した甕は、基本的に口縁部は内外面ともナデ、体部は内面ヘラケズリ、外面ハケ調整を施している。1354~1357は、口縁がほぼ直線的にのび、端部を内に肥厚させている。1356には、把手の剥離痕と考えられる痕跡がみられる。1358は、口縁がわずかに内湾しながら外反し、端部は丸く収まる。1360は、底部を一部欠くがほぼ完形で出土しており、球形の胴部にやや内湾しながら外反する口縁部をもち、端部を内側に若干肥厚させる。体部内面下半に指押さえをみるとことができる。1359、1361は、肩部のみを検出したが、1361には、頸部内面に指押さえをみるとことができる。1358、1360、1361には外面にスヌが付着している。1362は小型甕で、体部下半が欠損している。口縁部は内外面ナデで調整し、直線的に外反し、口縁部径は体部最大径に近い。体部は外面ハケメ調整後ナデ消しており、内面はヘラケズリで調整している。



1351

第359図 S S-9 出土遺物実測図(2)



第360図 SK-1 実測図

1363～1366は高坏である。1363は口縁部が直線的に外方へのび、口縁端部でやや外反する。1363、1366は外面をハケメで調整、内面は風化のため調整不明である。1364は口縁部が直線的にのび、端部丸くおさめている。1365、1366は、短い脚部に大きく開いた裾部をもち、円形の透かしをもつ。

これら土器については、いずれも布留式土器併行期と考えられ、古墳時代中期にまでさかのほる時期と考える。遺物の出土状況より、上方からの流れ込みとは考えにくく、出土地点の付近で、何らかの祭祀的行為を行った後、一括して廃棄されたものと考えるが、本遺跡内において、これ以外に同様の遺物を検出することもなく、同時期の遺構も存在しない。

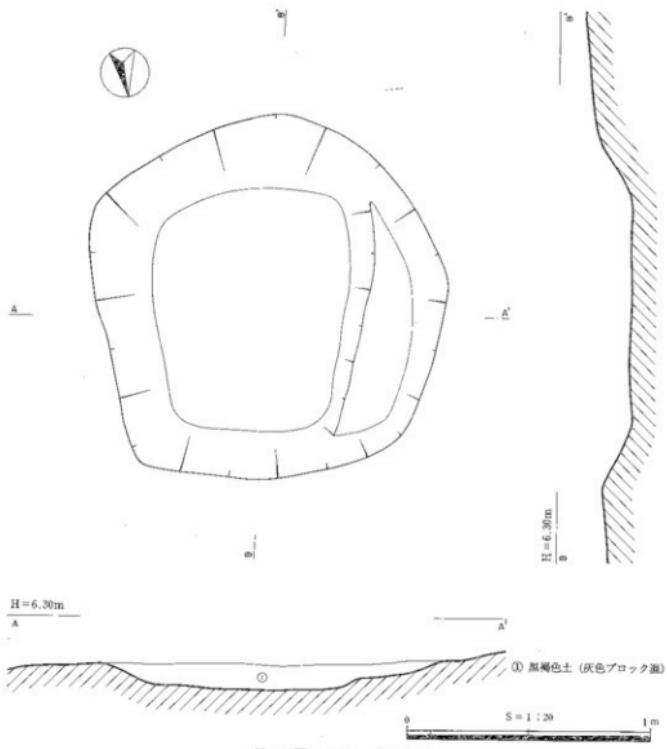
6 ピット群（第370～371・写真図版69）

・ピット群1（第370図）

ピット群1は、SS-7、8の東側に位置し、標高約6.7～7.2mの台地状の地形に合計24個のピットをもつ。調査前でも台地状の地形は確認でき、東へ向かってなだらかに下る地形は、陰田小犬田遺跡へと続いている。ピットは茶褐色系の埋土を中心に様々で、ピット内に遺物は見られなかった。ピットの規模も様々で、統一性、規則性は見られなかった。

・ピット群2（第371図・写真図版69）

ピット群2はA-1区の急峻な北側斜面と、谷部に挟まれるように位置している。東側にはSK-5が隣接する。標高約8.5mを最高部にして半月状になだらかに下る台地に、大小合計25個のピットを検出した。調査前でも尾根の裾部に広がる台地状の地形は確認できた。当遺構は、テラス状遺構とよく似ているが、尾根の斜面を削った形跡も見られず、台地も自然地形であると判断し、当遺跡中のテラス状遺構とは構造・性格の異なるものと考える。ピットの埋土は、いずれもよくしまった淡灰茶褐色土の単層で一連するものと考えるが、ピットの規模



第361図 SK-2 実測図

は様々で、径20~60cm、深さ20~60cmを測る。埋土中に遺物は見られなかった。ピットの並び方には規則性は見られなかった。

7 井戸 (SE-1、2) (第372~374図・写真図版72)

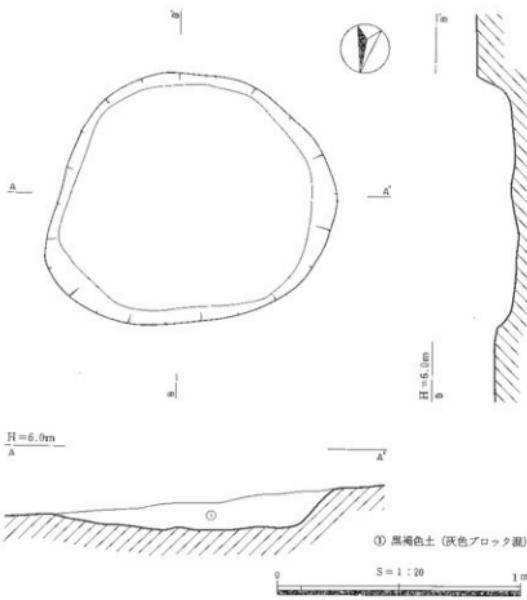
ピット群1が広がる荒神谷山北東の裾部では、2基の井戸 (SE-1、2) を検出した。

• SE-1

SE-1は、SE-2から約7m離れた斜面上部に位置し、直径約1.4m、深さ約1mを測る素掘りの井戸である。荒神谷山の地山層に掘り込まれ、側面部および底部は固く締まっている。第372図A-A'ラインの土層断面には枠らしき痕跡が見られる。遺物は出土していない。

• SE-2

SE-2は、調査区域の東端を流れる水路付近に検出した、樽を転用した井戸である。直径約65cm、深さ約40cmを測る。遺存状態が良く、ほぼ原形をとどめた状態で検出した。底板は、直径約55cm、厚さ約2.5cmを測り、



第362図 SK-3 実測図

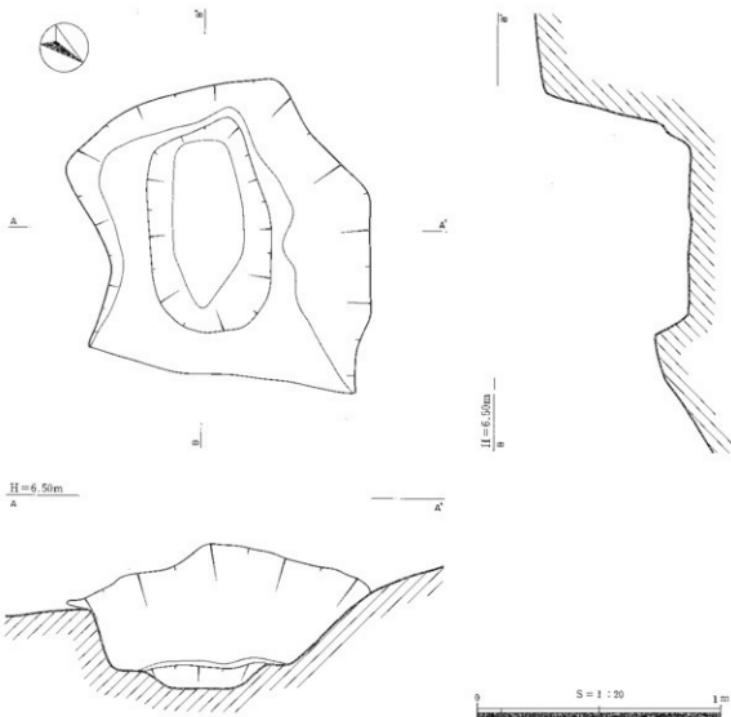
表面中央には直径約2cmの小孔を25箇所で確認した。底板の直下には敷石を検出した。第374図B-B'ラインの土層断面から、遺構面下に河川跡が確認でき、これが地下に水脈を形成していたと推測される。この水脈からの湧水を、底板直下の敷石および底板の小孔を経由させて木枠内に溜め込み、用水としていたと考える。またSE-2は、埋土の堆積状況から、人為的な埋め戻しは確認できなかった。

SE-2北東側の肩部付近には、その遺構検出面より下層に瓶と思われるガラスの破片が出土しており、のことから、SE-2は明治以降に構築されたものと判断した。

また、SE-2の西側肩部には、最長約70cmを測る長短4本の杭を検出した。そのうち3本は比較的遺存状態が良く、実測可能であった。これらの検出状況から、SE-2には覆いが設けられていたと推測されるSE-2の埋土中からは木片が検出されており、覆いの一部と考えられるが、明確に判断するには至らなかった。

8 遺構に伴わない遺物 (第375~380図・写真図版94)

1367~1385は須恵器である。1367は立ち上がりの有る壺身である。陰田編年の5式（6世紀末~7世紀初頭）相当と思われ、当遺跡出土須恵器の最古の段階にあたるものである。1368は高台の付く壺で、9世紀代に比定される。1369は底部糸切りの壺で、底部に墨書があり、「十田□」と読める。天地が不明であり、「□十田」である可能性もある。陰田編年の10式（8世紀後半）に相当しよう。1370は鉄鉢形土器であろう。1371は底部糸切りの皿、1372は脚台である。1373、1374は高台付きの壺の底部で、1373は内面にタクキがみられる。1375は円面鏡である。脚台に幅広の透かしがはいる。1376~1378は甕である。1376の頸部と1377の肩部にヘラ記号がみえる。1379~1385は壺の底部である。7~8世紀代に比定されるが、底部に穿孔のあるもの、あるいは穿孔されている



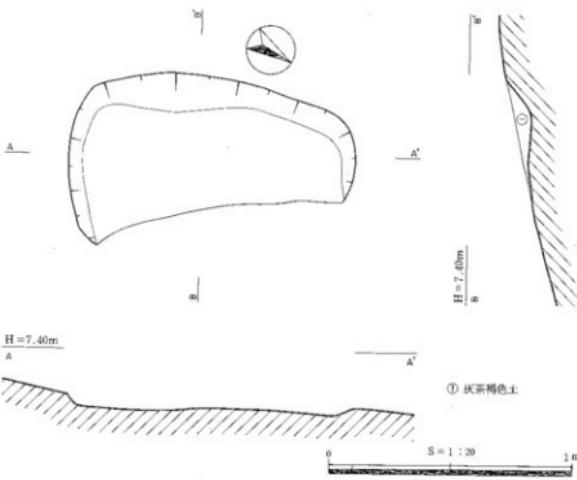
第363図 SK-4 実測図

可能性の高いものを集成している。破碎断面の向きによって、1380と1385は外面から、1381～1384は内面から敲打していると判断した。1379については判断できなかった。これらの土器については、偶然の产物である可能性についても留意されるところだが、祭祀後に穿孔して廃棄したものとの解釈も捨て切れない。

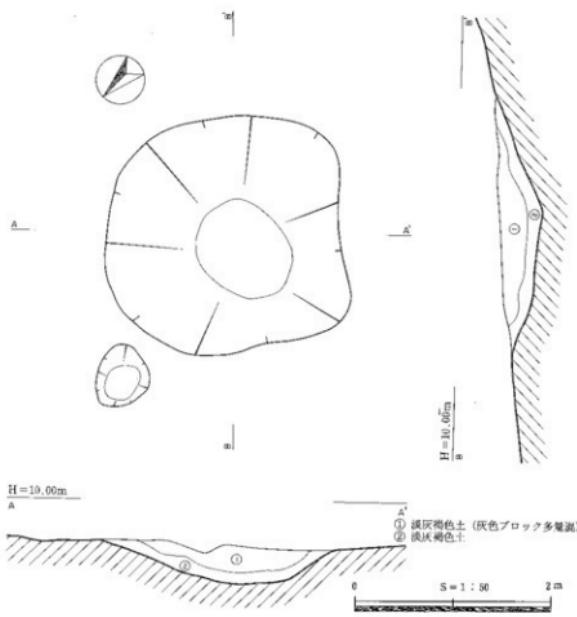
1386～1390は土師器である。1386～1388は丹塗り土師器で、1386は蓋形で、「回転台土師器」等と呼ばれるものである。1387、1388は皿である。1389、1390は手捏土器である。1391は、内面に布目痕がみえる製塙土器である。1392は土鍤である。

1393～1398は、中、近世の遺物である。1393は国産の白磁碗の高台部で、円盤形土製品と呼ばれるものである。1394は16世紀前半に比定される輸入青磁碗である。1395は瀬戸・美濃の皿で、大窯III期（16世紀後半）に比定される。1396は国産の青磁碗である。1397は瓦質土器で、擂鉢である。1398は銅錢で、「開元通寶」（唐・初唐621年）である。

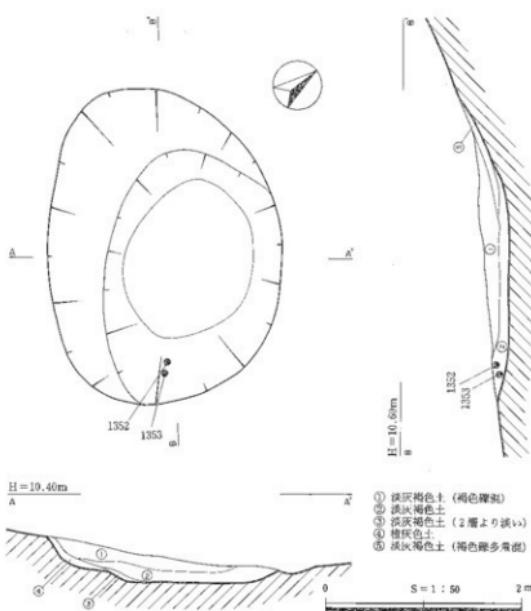
1399～1403は製鉄、鍛冶関連遺物である。1399は流出溝滓である。流出溝滓とは製鉄炉の炉底に近い炉壁の排滓孔より流れ出た滓であり、本資料は、排滓孔内から排滓溝にかけての滓（資料上部）と孔内の滓（資料下部）がくっついた状態で出土しており、製鉄操業中に、炉の排滓孔を1度開け直していると見られる。1度目の排滓



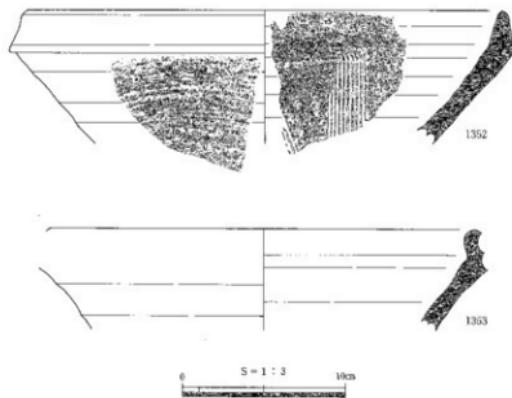
第364図 SK-5 実測図



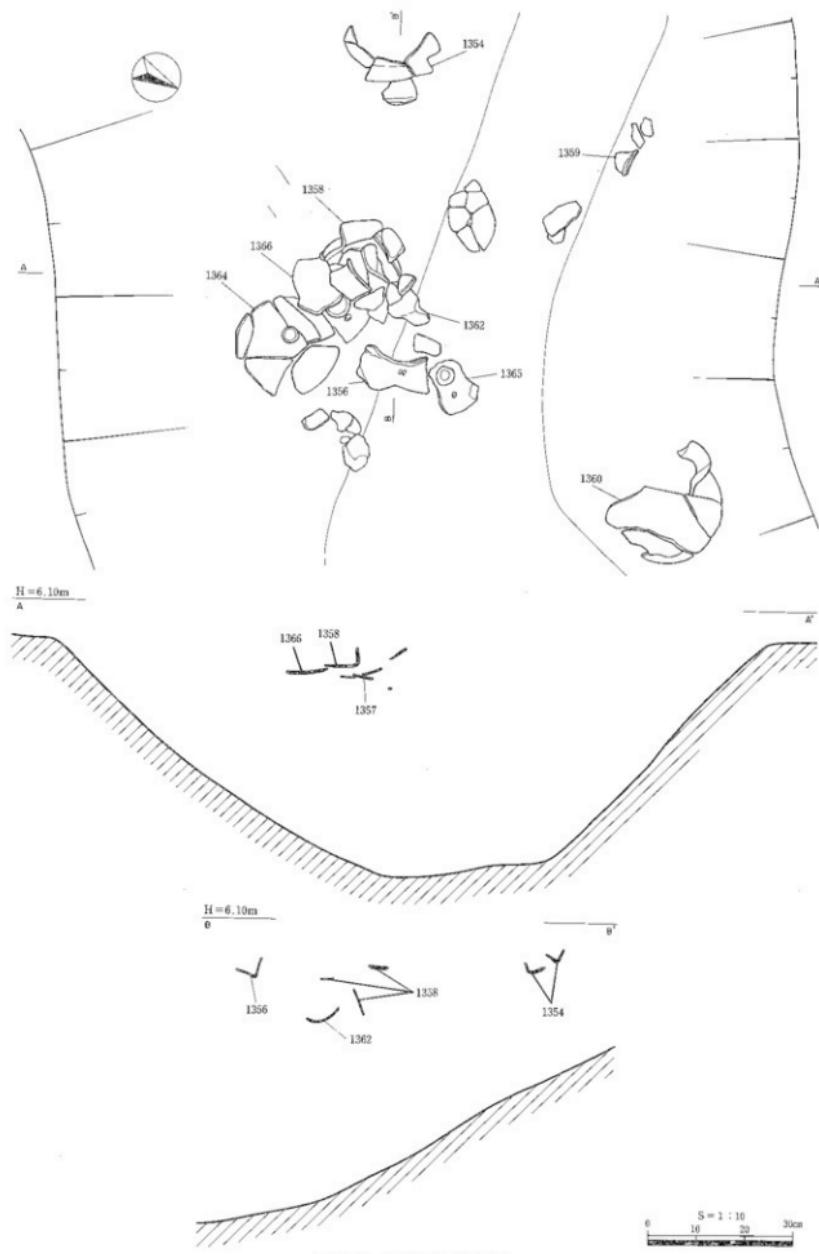
第365図 SK-6 実測図



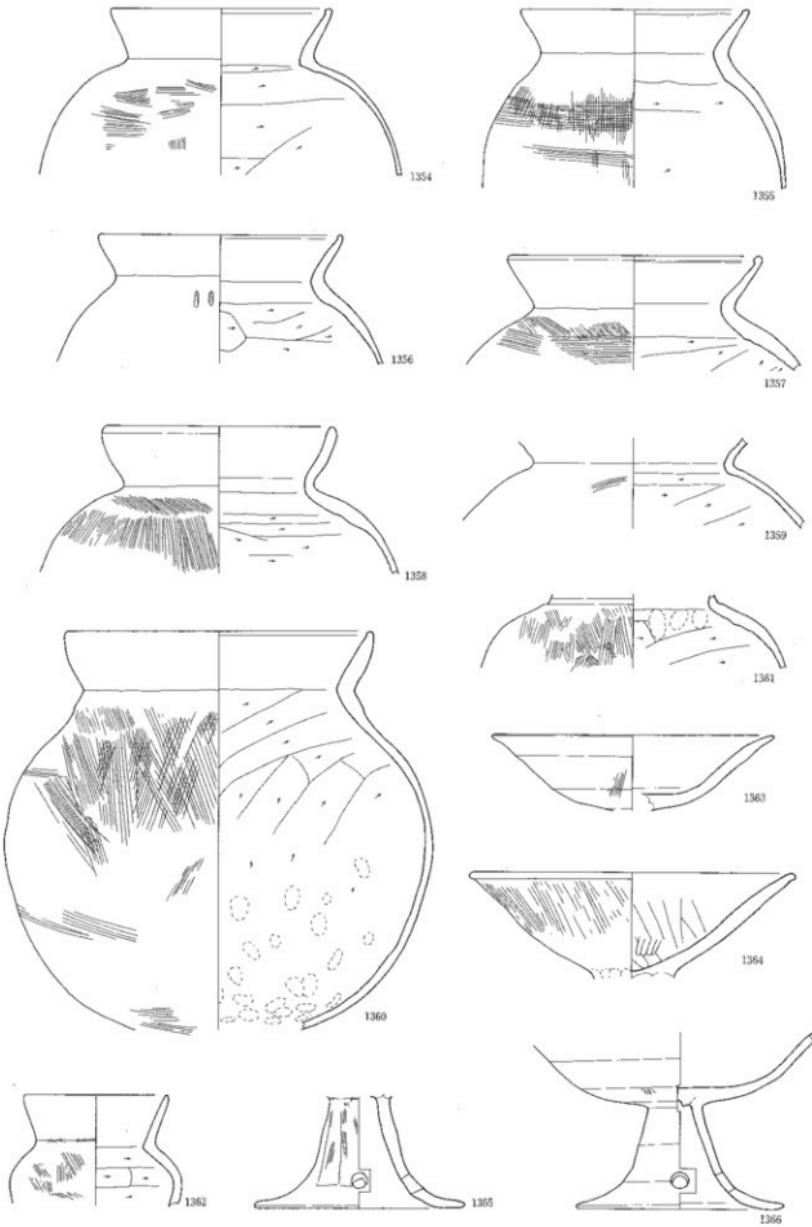
第366図 SK-7実測図



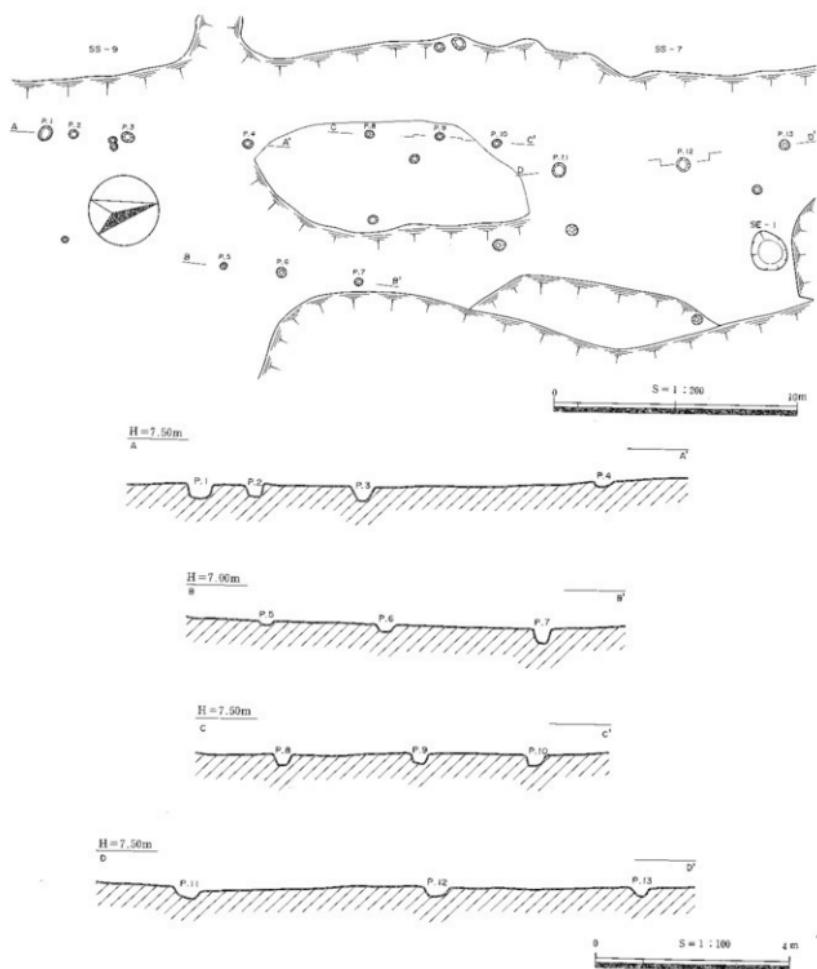
第367図 SK-7出土遺物実測図



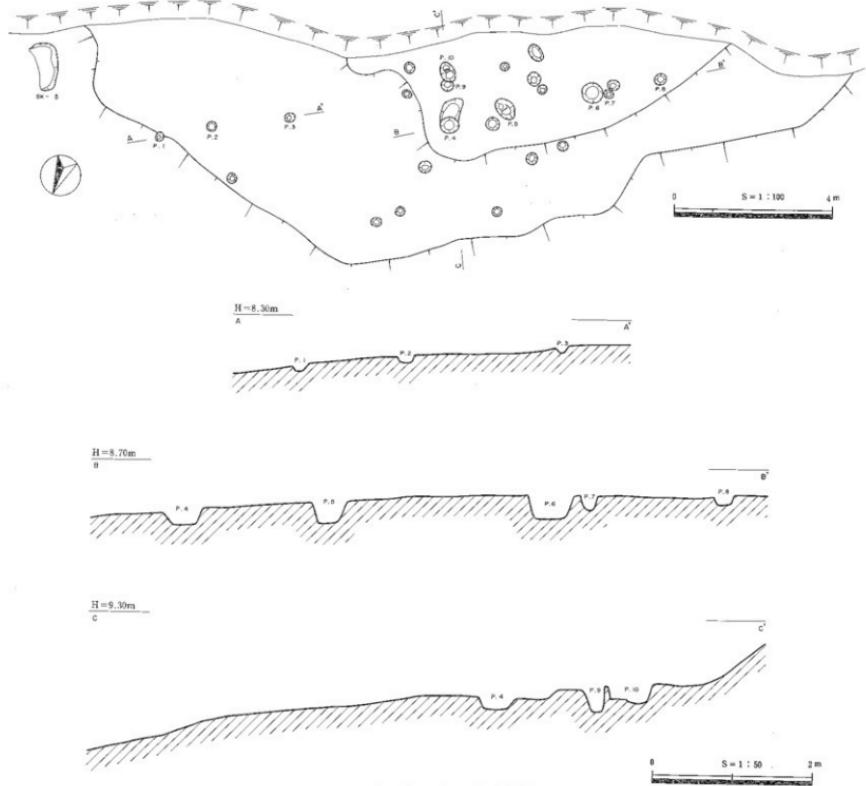
第368図 土器溜り 1 実測図



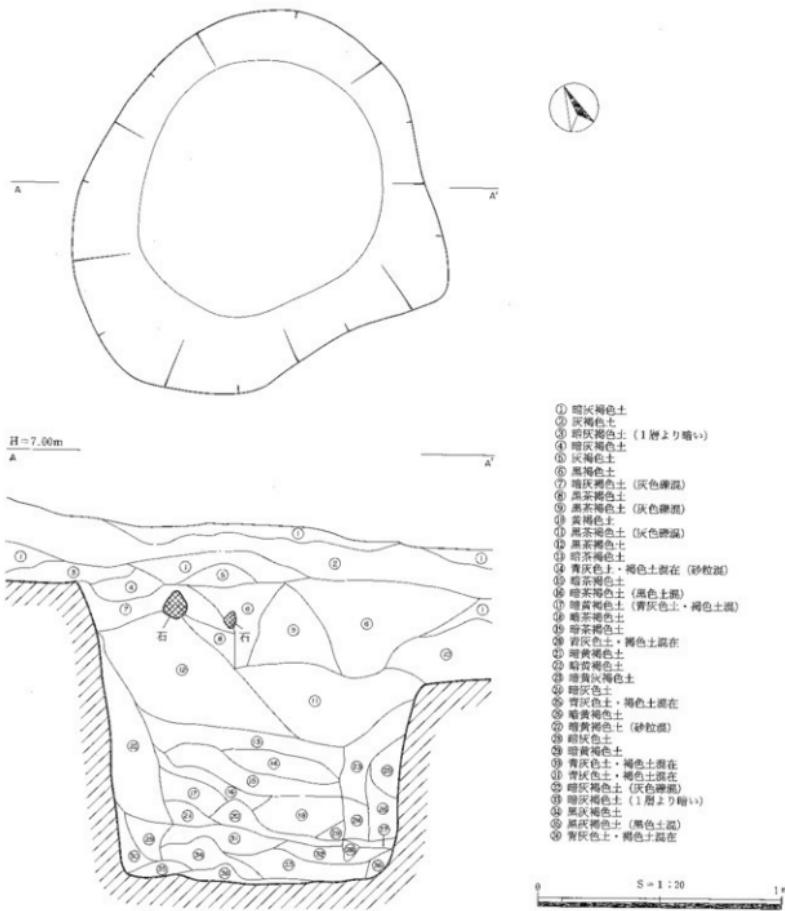
第369図 土器溜り 1 出土遺物実測図



第370図 ピット群1実測図



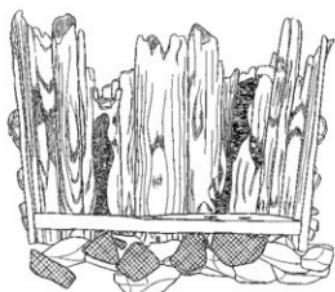
第371図 ピット群2実測図



H ~ 4.80m

A

A'



B

B

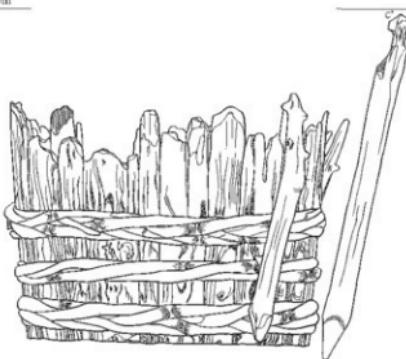
B'

C

C'

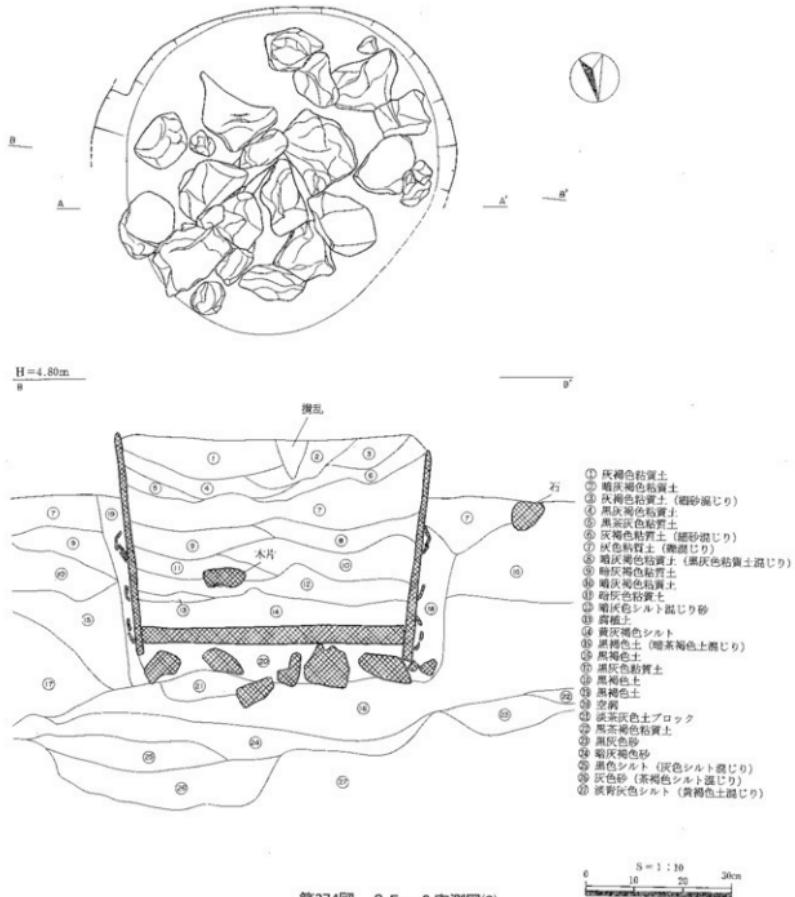
H ~ 4.90m

C



S = 1 : 10
0 10 20 30cm

第373図 SE-2 実測図(1)



孔より資料下部の滓が流れ、孔が詰まつたためこの上部に、新たに排滓孔を開けて、2度目の排滓をしている。2度目の排滓の時、径3cm前後の棒状の工具で排滓を促したようで、上部の流出溝滓には明確な工具痕が見られる。上部の滓は、孔内側で気泡の露出跡が見られ、排滓溝側は滑らかである。本資料の大きさより大型の製鉄炉より排出されたものと判断し、生成された時期は、出土した陰田荒神谷遺跡の主体的な時期である8世紀代と矛盾しないものと考える。1400、1401は轆の羽口の先端部破片である。1401の外面には椀形鍛治滓が付着している。1402は椀形鍛治滓である。椀形鍛治滓は、鍛冶操業中に鍛冶炉炉底にたまる滓である。本資料の上面は橙褐色に酸化しており、下面は黒灰色を呈し、全体に小さな気泡が見られる。1403は製錬滓である。製錬滓は製鉄工程で生成される滓である。本資料は全体に橙灰色から赤茶けた色を呈し、炉壁と思われるものが付着している（註7）。

1404～1409は石製品（註8）である。1404～1406は台石で、いずれも表裏ともに敲打痕が観察できる。点網部は擦痕を表す。1405、1406は部分的に熱を受けている。これらは鍛冶の際に使用された鉄砧石と思われる。1404、1405は花崗斑岩製、1406は細粒黒雲母花崗岩製である。1407、1408は砥石である。いずれも砥面は1面である。1407はアプライト製、1408は優白質細粒花崗岩製である。1409は黒曜石製のスクレイパーである。

註1 房總風土記の丘穴澤義功先生にご教示いただいた。

註2 鳥取大学教育学部赤木三郎先生にご教示いただいた。

註3 柳浦俊一 「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古』 第3号

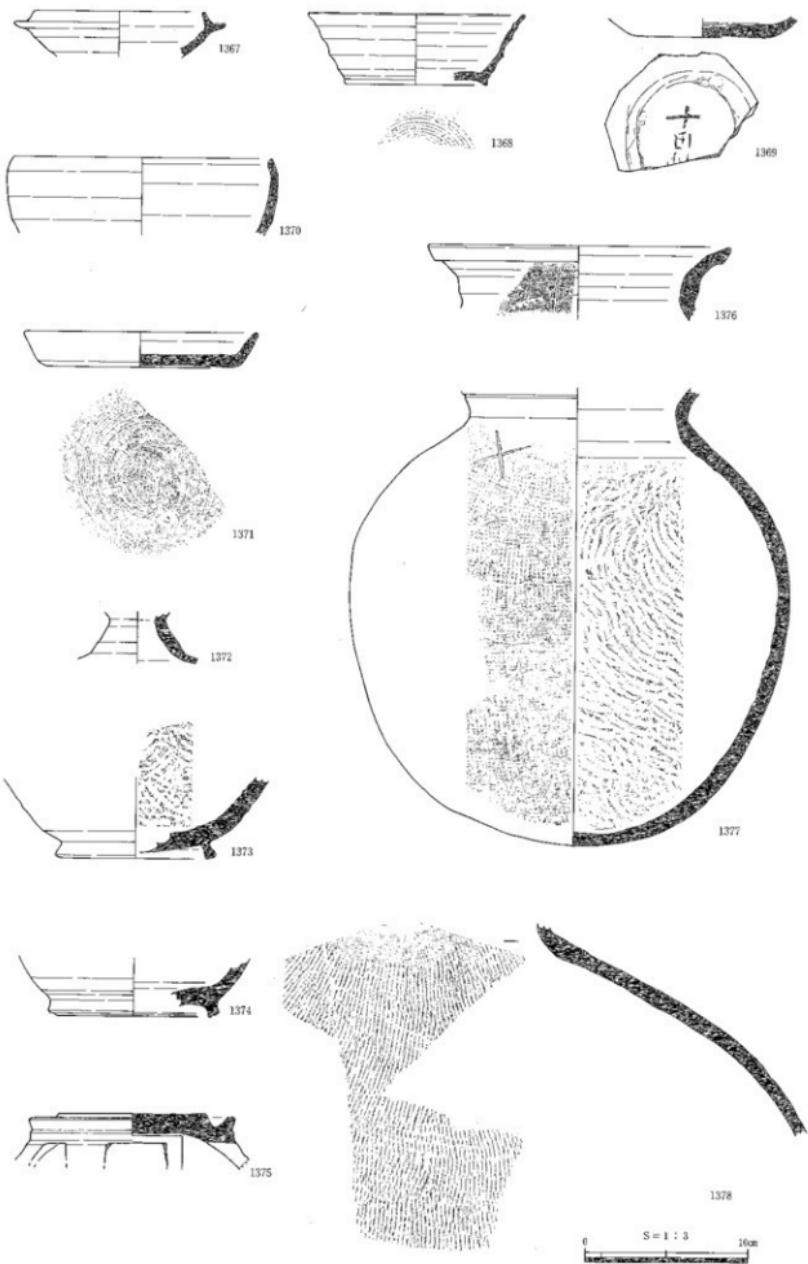
註4 前掲註3

註5 房總風土記の丘穴澤義功先生にご教示いただいた。

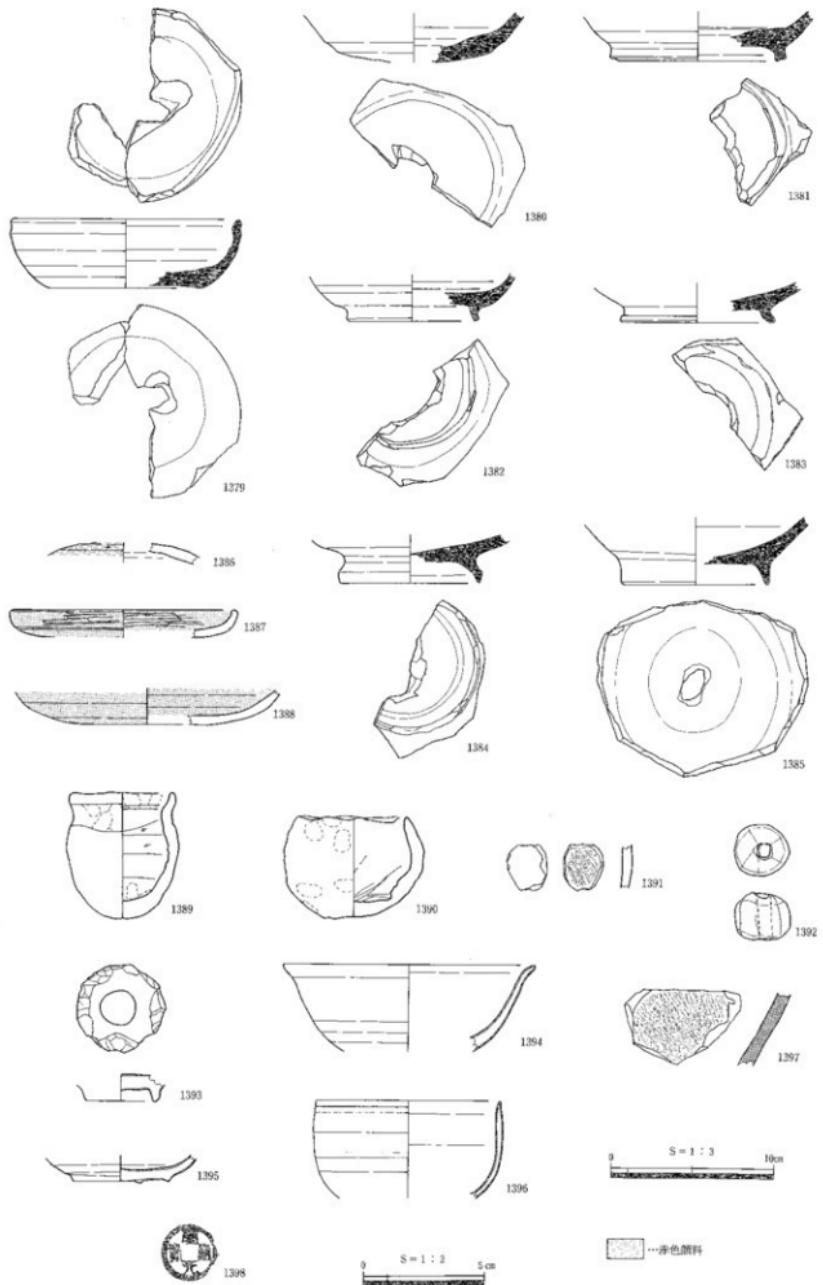
註6 萩本勝・佐吉和枝 「第4節；須恵器について」 『陰田』 米子市教育委員会 1984年

註7 房總風土記の丘穴澤義功先生にご教示いただいた。

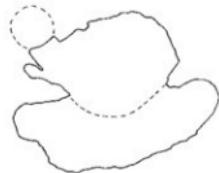
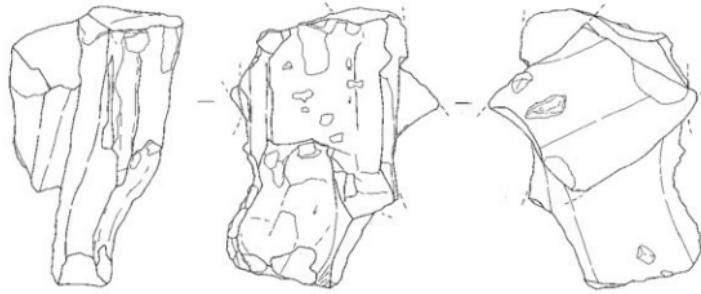
註8 石製品の石材については、鳥取大学教育学部赤木三郎先生にご鑑定いただいた。



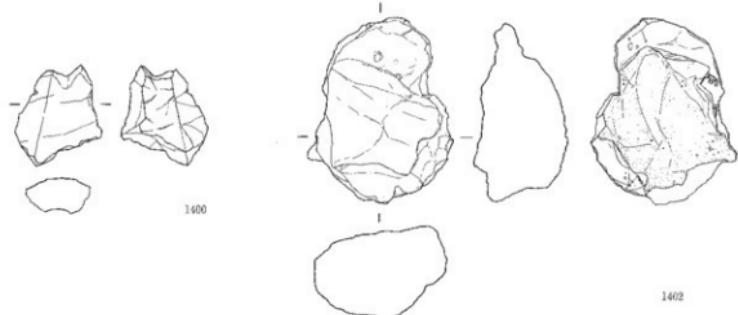
第375図 遺構外出土遺物実測図(1)



第376図 遺構外出土遺物実測図(2)



1399



1400

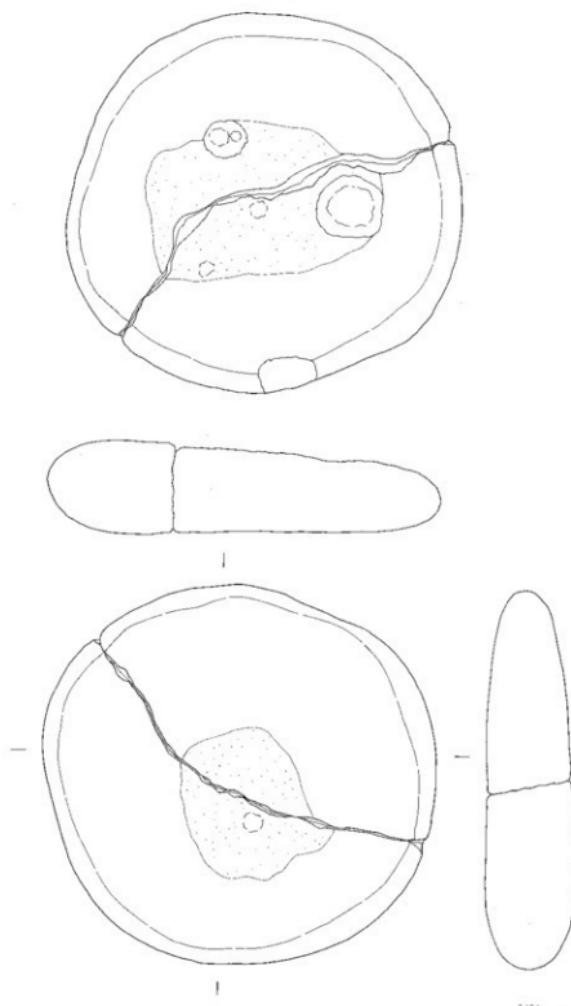
1402

1401

1403

0 S = 1 : 3 10cm

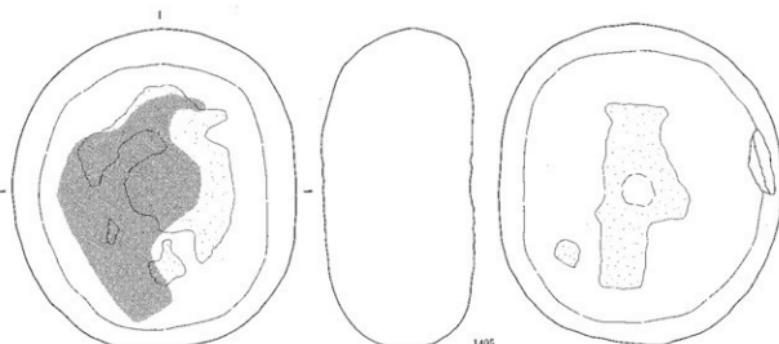
第377図 遺構外出土遺物実測図(3)



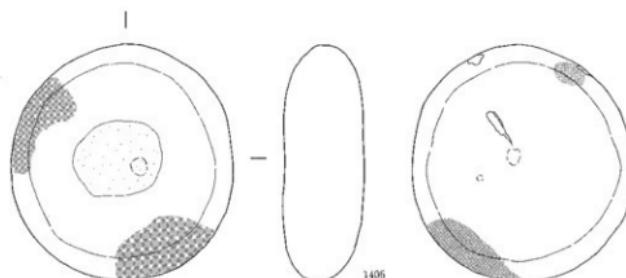
1404

0 S = 1 : 3 16cm

第378図 造構外出土遺物実測図(4)



1405

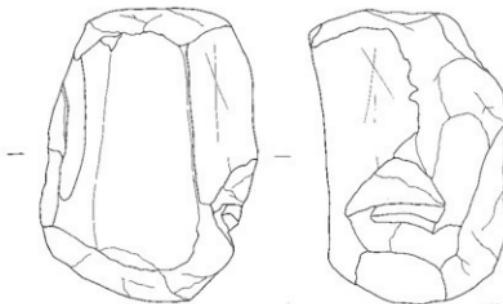


1406

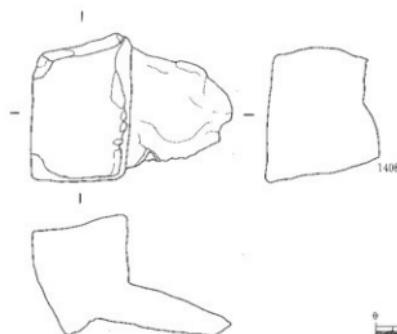
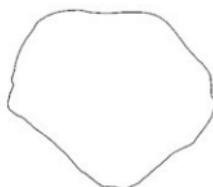


…受熱範囲
0 S = 1 : 3 10cm

第379図 遺構外出土遺物実測図(5)

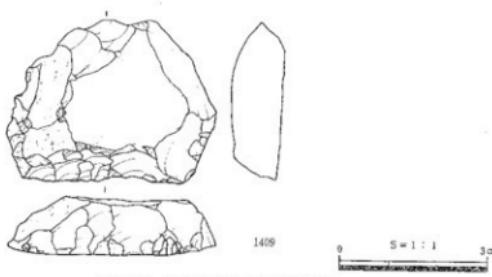


1407



1408

0 S = 1 : 3 10cm



1409

0 S = 1 : 1 3cm

第380図 遺構外出土遺物実測図(6)